Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

585 5

585-5

12005015236 16

納本

戲曲集　落葉日記

585-5

著士國田岸

集曲戲

記日葉落

東京高輸

第一書房

千九百二十八年

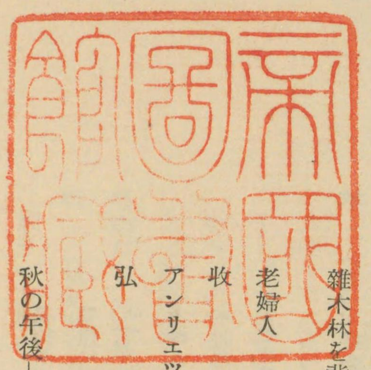
昭和三年 宮内省圖書寮

目次

落葉日記（三場）……七
百三十二番地の貸家（二場）……八一
〃 留守（一幕）……一二三
傀儡の夢（五場）……一五七
〃 ある親子の問答（一幕）……二一一
〃 明日は天氣（二場）……二四一

落葉日記（三場）

東京の近郊——
雜木林を背にしたヴイラのテラス
老婦人
收
アンサエツト
弘
秋の午後——



長椅子が二つ、その一方に老婦人、もう一方に青年が倚りかかつてゐる。それが毎日の習慣になつてでもゐるらしく、二人とも、極めて自然に、ゆつたりとした落ちつきを見せて、靜かに讀書をしてゐる。

老婦人は、純日本式の不斷着、ただ、肩から無造作に投げかけた毛皮の襟卷が、さほど不調和に見えないほどの身ごしらへ、身ごなし。

青年は輕快な散歩服。無帽。

牧　（書物が手から滑り落ちるのを拾はうともしないで）少し歩きませう。

老婦人　（書物から目をはなさずに）　もうあと二三枚……。

牧　（起ち上り、默つて相手が讀み終るのを待つ。が、なかなか濟みさうもないので、また腰をおろす）

老婦人　（目をあげずに）靜かになさいよ。

牧　（漠然と）　靜かにしてゐます。

長い沈默。

牧　（獨語のやうに）あなたほどのお年になられても、まだ、ものに凝るやうなことがおありと見えますね。

老婦人　……。

牧　ものに凝るといつても、そのことに熱中する、つまり、われを忘れてどうかうといふやうなことはおありにならないでせう。やめようと思へば、何時でもおやめになれる……。それをやめないでいらつしやるのは、ただ、ほかになさることがないからなんでせう。少くとも、ほかのことをなさるのと、別に違ひはないからでせう……。さうでせう。してみると……。

老婦人　（相變らず目を伏せたまま）　また、うるさいから……。

牧　（笑ひながら、しつつこく）ねえ、お祖母さま、あなたは、世の中の人間が、みんな、さういふ風に、老眼鏡をかけ、背中を丸くして、宗教の本を讀んでゐれば、それで間違

はないと思つておいでになるんでせう。

老婦人　間違がなけれや、どうなのさ。やかましいね、ほんとに……（書物を青年の鼻先につきつけ）これが宗教の本ですか。

收　（聊か拍子抜けがしたやうに）なんだ、アナトオル・フランスか……。La Vie en Fleur……。あんな爺にかかり合つてると、ひどい目にあひますよ。

老婦人　餘計なことを言つてないで、用意をなさい。（起ち上らうとする）

收　（それを制して）その前に、お祖母さま、一寸、お話しておきたいことがあるんです。

（間）此處でもいいでせう。

老婦人　……？

收　それぢやどうぞ……（と、老婦人を再び座につかせて）變だな、すこし……？

老婦人　なにさ、早く云つたら……。

收　今、言ひます。かういふ話をする時は、そんなに顔を見ないで下さい。

老婦人　あなたが下を向いてゐればいいでせう。それで、わたしに、どうしろといふの

さ。

收　もう御存じなんですか。

老婦人　なにを……。まあ、いいから云つてごらん。

間。

收　お祖母さまは、アンリエツトをどういふ處へお嫁にやらうと思つていらつしやるんです。

老婦人　あの娘をお嫁にやるのは、わたしぢやない。立派なお父さんがあるんだもの……。

收　しかし、そのお父さんは、外國にばかりいらつしやるし、お母さんが亡くなられてからは、お祖母さまのあなたが、何もかも引受けていらつしやるんでせう。さうすると結婚のことだつて、あなたが、いいつておつしやれば……。

老婦人　まあ、お待ち……。わたしには、それや、幾分の責任はある。しかし、ただそ

れだけさ。あの娘は、自分で自分の道を選ぶやうに教育してあるんです。

牧　どうかしら……。

老婦人　なんです、失敬な……。お前こそ、まだ海のものとも、山のものともわからないぢやあないか。今やつてゐる法律なんか、何になるものか。アンリエツトは、あれで、なかなか頭のいい娘だからね。

牧　僕には勿體ない……。お祖母さまは一體、どういふ男が、お好きなんですか。

老婦人　わたしがかい。

牧　（一寸まごついて）お年は別として……。

老婦人　どうして？　だから　お前は駄目なんだよ。若いばかりが女ぢやあるまい。笑ふなら云つてあげようか、氣障でしやうがない、お前みたいな男は……　（怒つたふりをする）

牧　（とぼけて）お髪に松葉がひつかかつてゐますよ。

老婦人　（こだはらずに、取つて棄てる）

牧　お祖母さまは、いくつの年にお嫁にいらつしやつたんです。

老婦人　どうして？

牧　どうしてでも……。

老婦人　わたしは　早かつた……。十八の春……。アンリエツトの年に、わたしは、もう女學校をすまして、例のパリアニさん、あの人のお母さまのオリガさんのところで、伊太利語の勉強をしてゐたものだ。

牧　お祖父さまが、羅馬から迎ひに來て下さるのを待つていらつしやつたわけですね、お祖父さまが、その頃……？

老婦人　お年かい？　さあ、兎に角、お前みたいに若くはなかつたよ。口髭を生やして、堂々たる紳士だつたから……。

牧　堂々たるはいいな。お祖母さまも、その頃は、楚々たる令嬢で……。

老婦人　あたり前さ。お前のお母さんほど丈は高くなかつたけれど、アンリエツトみたいに、おちびさんでもなくさ……。

牧　さうですとも……。その上、乘馬と幅跳びがお得意でね……。

老婦人　（笑ひながら）それはうそ……。

牧　ねえ、お祖母さま、あなたが、お祖父さまと御一緒に巴里でお寫しになつた寫眞が、この間、お母さまの手文庫から出て來たんですよ。裾のしぼんだ黑いカアプを、かう、輕くひつかけて……。あれは、ルユクサンブウルでせう、誰かの像の前で、鳩に餌をやつてらつしやるところ……かういふ手つきで……。それを見て、僕は、「へえ」つて云つたきり、そこへすわつてしまひました。

老婦人　そんな寫眞があつたかね、お祖父さまはどうしてるのさ。

牧　お祖父さまは、これはまた、どうかなさればよささうなものを、ステツキを兩手で、かう、水平に持つたまま――器械體操でもするやうにね――つくねんと、若い美しいお祖母さまの横顏を見つめておいでになるのです。

老婦人　何を云ふんです。

牧　なるほど、髭だけは立派ですね。

老婦人　さうですか。

牧　さうです。

老婦人　あの頃の寫眞は、さうだ、隨分長く出して見ないから……。わたしの處にも、そんなのがある筈だ……。へえ！、ぢや、あん時だ、きつと……。

長い沈默。

牧　お祖父さまと云ひ、うちのお父さまと云ひ、アンリエツトのお母さまと云ひ、みんな早死をしたんですね。

老婦人　早死をしたね。イヴオンヌなんか、まだ三十にもなつてなかつたんだからね。

牧　僕も早死をしさうだな。今度は、まあ助つたやうなものだけれど……。

老婦人　お前は、それがいけないんだよ。すぐに自分を弱いものと決めてしまつて……。

牧　決めてやしませんよ。だから、今日だつて、テニスをやらうつて云へば、例の、柔道二段が、君は駄目だつて、やらせないんです。アンリエツトはまた、それをいいこと

にして、僕の方を振り向きもしないんです。

老婦人　Tu es bête !

長い沈默。

老婦人　寒くないかい、お前、何も上へ着なくつて……。今日は、風が冷たい。

收　一と月ぐらゐ、すぐたつてしまひますね。（間）ここへ來た時は、まだ白楊（ポプラ）の葉が、こんなに黄色くなつてませんでした。兎に角、もう、病人とは見えないでせう。

老婦人　見えない。だけど、もうあと、一年間は用心をするんだね。また何時かのやうなことがあると……。

收　（急に暗い顏をする）海岸行きを止めて、もう少し、ここにゐたいなあ。

間。

老婦人　寒くさへならなければやねえ……。何しろ、冬向きぢやないよ、ここは……。

收　どつち道、僕はここにゐない方がよささうですね。

老婦人　どうして？

收　どうしてつて……。お祖母さまは、一番、そのわけを御存じなんでせう。

老婦人　さ、もう、そのことを云ふのはおよし。男らしく、さつさと發つておしまひ、ね。お祖母さまもわるかつた。もつと早く、お前の心持ちを酌んで、できるだけのことをすればよかつたんだけれど……。もう、今になつては、どうすることもできない。お前はこれから、どんな幸福でも……。

收　得られるつておつしやるんでせう。僕さへ、それを望めばね。しかし、お祖母さま、僕は、今が一番幸福なんですよ。いいえ、ほんとです。アンリエットは、まだ時々は僕と二人きりで遊んでくれます。朝の食卓は、毎日僕たち二人だけの爲めに用意されてゐるでせう――お祖母さまは、遲くお目覺めですからね。

老婦人　Pauvre garçon !

收　今だつて、御覽なさい、もう日が暮れる、また三人きりになれる。さう思つただけ

で、氣分がこんなに、いいぢやありませんか……。

老婦人　（青年の肩に手をかけ）　氣分がいいなら、泣くのはおよし。さ、その邊を一と廻りして來よう。

收　……。

老婦人　さ、お起ち……。

この時、運動服姿の少女が、ラケットを振りながら、現はれる。

アンリエツト　ああ、喉が渴いた。

老婦人　もう濟んだの。

アンリエツト　だつて、ボールが見えないんですもの、暗くつて……。

老婦人　それや、さうだらう。

アンリエツト　でも、まだ御飯ぢやないでせう。あら、どうなすつたの、收兄さま？

老婦人　シヤトオブリヤンに泣かされたんですつてさ。

アンリエツト　小說を讀んでお泣きになつたの？　可笑しいわ。

老婦人　それより、お前、弘さんは……。

アンリエツト　ええ、それがね、お祖母さまのとこへ、左樣ならをしに來ようとしてらしつたのよ。さうしたら、そら、あの柿の木を見て、柿を取るつてきかないの。だから、あたし、お祖母さまに伺つて來るから、待つてらつしやいつて、さう云つて來たの。

老婦人　まだ熟してやしないでせう。

アンリエツト　でも赤いことは赤いわよ。だから、取つていいこと？

老婦人　ああ、それやいいけれど、怪我をしないやうになさいよ。

アンリエツト　ええ。（行きかける）

收　（起ち上り）　僕も取らう　（から云つて少女の後を追ふ）

老婦人　つるやにさう云つて、物乾竿を出してお貰ひ。

收　ああ、さうだ　（裏の方へ走つて行く）

老婦人　（叱るやうに）また、走るんぢやありません。

すると、入れ替りに弘が現はれる。

アンリエツト　あら！

弘　もう遲いから、僕、歸りますよ。また叱られちやわ……。

アンリエツト　（つまらなさうに）どうして……。

弘　柿は明日（あした）でいいでせう。

アンリエツト　明日でいいでせうつて、御自分で云ひ出したくせして……。

弘　（快活に笑ひながら）さよなら、小母さん（帽子を脱ぐと、いきなり、全速力で走り出す）

老婦人　みなさんによろしく。

弘が去つた後へ、收が竹竿を持つて出て來る。

アンリエツト　（その竹竿を取らうとする）どら、貸して……。

收　君ぢや駄目だよ。

アンリエツト　いや、あたしが取る。

老婦人　アンリエツト！

アンリエツト　（その方をちらと見て、投げ出すやうに竹竿を收の手に渡す）あたしにも取らしてね。

二人麥を消す。

老婦人　（兩人を見送つた後、再び書物の頁を繰る）

長い沈默。

アンリエツトの聲　あれがいいわ。もつと、こつち……、そら、そこよ……。赤いのがあるぢやないの……盲（めくら）ね。

老婦人　（時々聲のする方に氣を取られるらしい。それでも、すぐに、書物の上に目をおとす、音讀をし始める）J'étais loin d'être un beau garçon et le pis est que je manquais de hardiesse. Cela me nuisait auprès des femmes.

アンリエツトの聲　まあ。そんなにひどくしちや、傷がついてよ……。あたしに貸して……（間）大丈夫よ……見てらつしやい。

老婦人　（音讀する）Car j'estimais que le plus grand péché d'une femme est de n'être

pas belle.

アンリエツトの聲　どうするの。樹へ登るの……。あぶないわよ。

老婦人　（一寸、耳を聳てる。が、すぐに）Je remarquais que dans le monde, beaucoup de jeunes gens, qui ne me valaient pas, plaisaient et réussissaient mieux que moi.

アンリエツトの聲　その枝に、いつぱい赤いのが生つてるぢやないの。ええ、その、あなたが乘つてらつしやる枝……。

老婦人　J'ai toujours cru que la seule chose raisonnable est de chercher le plaisir.

アンリエツトの聲　（一段聲を張り上げて）　あら、お祖母さま、あのねえ、牧兄さまがね、柿の樹の高い處へ登りました。

老婦人　（顏を上げて、心持ち眉をひそめるが、すぐにまた目をおとし）Il n'est pas difficile de s'apercevoir si un homme est heureux ou malheureux. La joie et la douleur sont ce qu'on dissimule le moins, surtout dans la jeunesse.

アンリエツトの聲　いやよ、いやだつてば……。お祖母さま、牧兄さまが、あたしに、

澁柿をぶつけます。（はしやいで）そんなことをすると、かうしてよ。

長い沈默。

老婦人　Ils étaient jaloux, haineux, ambitieux. J'étais indulgent et paisible; j'ignorais l'ambition.

アンリエツトの聲　あら、いいの、そんな無茶なことをして……。

老婦人　Il ya de ces passions violentes qui font les grands hommes et dont je n'avais pas l'étoffe.

アンリエツトの聲　お祖母さま、牧兄さまがね、柿を皮ごとたべますよ……。よろしいんですか。ずるいわ、そんな……。

老婦人　（だんだん、落ちつかぬ樣子を示しだす。目を書物から放し、時々、聲のする方を見る）

アンリエツトの聲　お祖母さま。

老婦人　なんです、やかましい。

アンリエツト　お祖母さま、あのね（姿を現はす）あのね、牧兄さまがね、柿の樹の上でお晝寢をするんですつて……。目をつぶつて、腕組みをして、眠（ね）てるの。いくら棒でつツついても、起きないわよ。

老婦人　いたづらするんぢやありませんよ。もう降りるやうに、さうお言ひ……。

アンリエツト　（笑ひながら去る）

老婦人　（しばらく默讀を續けてゐる）

アンリエツトの聲　牧兄さま、早く採つて頂戴よ、暗くなつてよ。（間）いやね、もう少し左、左よ、左だつたら……。それや、右ぢやないの……。そこよ、手がさはつてるのにわからないの、それ、それ、ええ、ええ、それよ。

老婦人　（再び音讀を始める）Mais ce dont je m'aperçus après une longue observation, c'est qus le désir embellit les objets sur lesquels il pose ses ailes de feu, que sa satisfaction, décevante le plus souvent, est la ruine de l'illusion, seul vrai bien des hommes.

アンリエツトの聲　もういいわ、それくらゐで……。ほんとに、いいのよ、もう澤山……。（聲がふるへる）もうよして頂戴……、そんなに上は、あぶなくつてよ、ねえ、牧兄さま、もういいつて云ふのに……（泣聲になる。急に、高い聲で）お祖母さま、牧兄さまが、云ふことを聽きません。ずんずん高い處へ登つて行くんですよ……細い枝のところへ……。

老婦人　（びくつとする）牧、もういい加減にしないかい。

長い沈默。

アンリエツトの聲　それ御覽なさい。（間）え！　みんなで……？　隨分あるわ……。一（ひ）い、二（ふ）う、三（み）い、四（よ）お、五（い）つ、六（む）う、七（なな）、八（や）あ、九（こ）、十（とを）、十一、十二……十三……

老婦人　（また、讀む。今度は、やや、高い調子で）

O Thébains! Jusqu'au jour qui termine la vie
Ne regardons personne avec un oeil d'envie.

Peut-on jamais prévoir les derniers coups du sort ?
Ne proclamons heureux nul homme avant sa mort.

アンリエットの聲　あら、どうするの、そんな上へ登つて……收兄さま、駄目よ、駄目よ、その枝は駄目、……後生だから、降りて……。

老婦人　（此の時、突然何かに悸えたやうに、書物を放した手を、痙攣的に、口のところにもつて行く。そして、アンリエットの「あツ、あぶないッ！」といふけたたましい叫び聲が聞える前に、もう立ち上つてゐる）

――幕――

二

老婦人
アンリエット
一枝
弘
つる

翌年の三月下旬の朝――

前と同じ長椅子が二つ、その一方に老婦人、もう一方にアンリエットが倚りかかつてゐる。

二人とも、讀みかけの書物を膝の上にのせたまま、默つて、何か考へてゐる。

少女は喉に濕布をしてゐる。

老婦人　もうぢき本郷のお叔母さまが見えたら、御挨拶だけして、すぐあしたのおさらひをするんですよ。

アンリエット　ええ、でも、十時には弘さんがいらつしやるのよ。

老婦人　今日は、まだ、テニスはいけません。

アンリエット　どうして……？

老婦人　どうしてつて、お前、やうやく熱がとれたばかりぢやありませんか。

アンリエット　ぢや散歩は……？

老婦人　今日、一日、ぢつとしておいで、ね、好い子だから……。この次の日曜は、テ

ニスでもなんでもなさい。弘さんには、蓄音機でも聽かせておあげ……。

アンリエット　あの方、蓄音機なんかお嫌ひよ。

老婦人　そいぢや何が好きなのさ。

アンリエット　あたしの聲を聞くのが好きなんですつて……。

老婦人　（可笑さをこらへて）お前の歌かい？

アンリエット　歌でもなんでもよ。あたしが默つてると怒るわよ。

老婦人　「怒る」とはなんです。

アンリエット　お怒りになります、そいぢや……。

老婦人　やれやれ……。お前のお相手には持つて來いの人だ。ぢや、お祖母さんには、後生だから、もう少し默つてておくれ。お前と一緒にゐると本なんか讀めやしない。

アンリエット　だつて、お祖母さまは……。

老婦人　もう澤山……。口を縫ひつけとくから……。

アンリエット　（脣を結んだまま——口を縫はれたつもりで——聲を立てて笑ふ）

老婦人　（それには相手にならずに、書物の頁をくる）

長い間。

つる現はる。

つる　お手紙が參りました。

老婦人　（手紙を受け取り、開封する）　本郷へ電話をかけてね、もう奥さんはお出掛けになつたかつて聞いてごらん。

つる　はい。（去る）

老婦人　（手紙を讀む。手紙は外國郵便である。可なり長文である。それは、身内の者からの懐しい便りに相違ない。それはまた、ある重大な意味を含んだものでもあるらしい。そして、最後に、いろいろな云ひ知れぬ感動を、讀むものの心の隅々に殘すものでなければならない）

アンリエツト　（この間、祖母の顏色と、その心持ふるへてゐる手先に、不斷の注意を拂つてゐる。つひに堪りかねて）お父さまからでせう。

老婦人　（默つてうなづく）

アンリエツト　（雀躍して）なんて……。あたしには……。

老婦人　（手紙の頁を一枚一枚あらためて見る。封筒の中をのぞく）　御免、御免、これがさうだ……。さ、あつちへ行つて、ゆつくりお讀み……。

アンリエツト　どうして、此處で讀んぢやいけないの。

老婦人　此處でもいいさ……。少し、靜かにして……。（讀みつづける）

アンリエツト　（これも夢中になつて、手紙を讀む）

老婦人　（一度讀みをはつて、更に讀み返す）

つる現はる。

つる　あの、本郷の奥さまは、もう一時間ばかりまへにお出掛けになつたさうでございます。

老婦人　ああさう。ぢや、もう見える時分だから、用意をしてね。

つる　はい。（去る）

老婦人　（手紙を封筒にしまひながら）お父さまから、なんて？
アンリエツト　一寸待つて頂戴よ。むつかしいことが書いてあるの、あたし、わからないわ、ここんとこ……。
老婦人　讀んでごらん。
アンリエツト　いやあよ。
老婦人　おや、お祖母さんにも……？
アンリエツト　だつて……。ぢや、お祖母さまのところへは、なんて……？　あたしのこと書いてある。
老婦人　書いてあるとも……。お前のことばかりさ。
アンリエツト　ほんと？　何か、あたしのこと、云つておあげになつたんでせう。ひどいわよ、お祖母さまつてば……。
老婦人　どら、讀んでごらん。
アンリエツト　ぢや、あたしがいいとこだけね。……――「十一月二十日出の手紙、旅

をしてゐたので、今日やつと受け取りました。字も文章も、だんだん上手になつて……」――いやなお父さまね、ここはいや……――「あの寫眞で見ると、ずゐぶん肥つたやうだが、なかなか可愛らしい……」――お笑ひになるから、いや。駄目だわ、どこを讀んでも……。
老婦人　そんなことばかり云つてないで、みんな讀んだらいいぢやないか。
アンリエツト　ぢや、ここだけね。――「牧さんはお氣の毒なことだつた。その場にゐたお前もさぞかしびつくりしたらう。止めても聽かなかつたと云ふのだから、お前に罪はないわけだが、一緒に遊ぶときは、誰とでも、よく氣をつけないと、さういふ取り返しのつかないことになる。お前に怪我がなくつて、まあ、よかつたが、木登りなんか、女の子はしない方がいい」――しない方がいいですつて……。
老婦人　（目に涙をためて）牧のことはそれだけ……？
アンリエツト　ええ、それから、ここは飛ばしてと……。
老婦人　どこを飛ばすのさ。

アンリエツト　――「この次は佛蘭西語で手紙を書いてごらん。お祖母さまに直してい
ただかないでだよ」おつと……讀んぢやつた。

この時、つるに案内されて、一枝が現はれる。喪中に相應はしい日本服。

一枝　お變りはいらつしやいませんか。

老婦人　ありがたう。あんたこそ……。

一枝　御勉强？　アンリエツトさん。

アンリエツト　（會釋）

一枝　お風邪はいかが……。もう、およろしいの。

老婦人　家に引込んでるのが嫌ひな娘で……しやうがないんだよ。よく、早く出て來ら
れたね。

一枝　でも、樂しみにしてゐたんですもの。（あたりを見廻し）一箇月ぶりですわね。す
つかり春らしくなつて……。

老婦人　ぢや、あつちへ行かうか。

一枝　いいえ、ここがよろしいの。（椅子を引き寄せる。すわる）

アンリエツト　ぢや、叔母さま、御ゆつくり……（去らうとする）

一枝　あら……どこへ？

老婦人　あんまり長く外にゐると、またなんだから……。あとで、呼んであげます。

アンリエツト　（去る）

一枝　もう大丈夫だと思つてゐましたのに、此處へ來ると、やつぱり……（目にハンケチ
を當てる）

老婦人　それや。さうだらう。

長い沈默。

一枝　柿の木、もうお伐らせになりましたのね。

老婦人　あれで、なかなか手間が取れたんだよ、運び出すのに……。まる一日がかりだ
つた。倒したのを見ると、隨分、大きな樹さ。根も掘り出して、持つて行かせたの。あ

の跡には、牧の好きだつた「もつこう薔薇」でも植ゑようかと思つて……。

一枝　……。

老婦人　わたしも、秋から、すつかり老い込んでしまつた。

一枝　そんな心細いことをおつしやらないで下さい。お母さまは、あたくしなどよりは、ずつとお元氣ですわ。お樂しみがおありになるせゐでせうね。

老婦人　樂しみつて、あんた……。

一枝　あたくしなんか、その後、本を讀む氣もしませんもの……。

老婦人　それはまた、別さ。わたしのは、これや、病氣だもの。

一枝　そんな御病氣なら結構ですわ。でも、こんなことぢやいけないとは思ひますの。近頃、また、更紗を描いてみてるんですのよ。碌なものは出來ませんけれど、あれでまあ、暇潰しにはなりますから……。

老婦人　それはいい。こんだ、見せて貰ひに行かう。それから、もつと氣の晴れるやうなことしてみるんだね。もう、テニスなんか、駄目かね。

一枝　あたくしがですか。おやおや、どんな恰好でせう。

老婦人　恰好なんかどうだつて、やつぱり氣持を明るくするのは、運動に限るやうだね。

一枝　……。

老婦人　音樂なんかも、いいだらうけれど、あれは、また、自分で自分に强ひることができないから……。

一枝　さうですわ……。多少、機械的にでもできることでなければね。

老婦人　相手がゐてくれるといいんだよ。

長い間。

一枝　相手がゐてくれるといいんですわ。どんな相手でも……。

長い間。

老婦人　牧なんかも、病氣のせゐもあつたらうけれど、何か運動のやうなことをしてゐ

る時だけだつたからね、快活らしく見えたのは……。

一枝　あの子は、運動は、あんまり好きぢやなかつたんですけれどね……。

老婦人　それが、やれば、ああなるんだから……元氣さうに……。面白さうに……。

一枝　アンリエツトさんと一緒だつたからでせう、それは……。

老婦人　そればかりぢやないよ。

長い沈默。

一枝　子供の時から、木登りなんか、ただの一度だつてしたことはないんですけれどね。全く不思議なくらゐですわ……。あの日に限つて……なんだつて、また……。

老婦人　もう、それを云つたつて、仕方がないさ。（手紙を見せながら）今、見からも云つて來たんだけれど……。

一枝　お兄さまは、もう御存じなんですの。

老婦人　あの知らせを讀んだのが、二月二十日と書いてある。――冬の間、アルヂエリヤの方をまはつてゐたらしい。

一枝　よく旅にお厭きになりませんわね。

老婦人　あれから、もう十年、地中海のぐるりを歩きまはつてゐるんだからね。――娘の大きくなるのも見ずに……。

一枝　お獨りでね。

老婦人　……。

一枝　アンリエツトさんをお呼びにならうとはなさいませんの。

老婦人　若い娘が、旅で一生を送る考古學者についてまはつても仕方があるまい。以前のやうに、巴里に落ちついて、研究をしてゐるんなら別だけれど……。

長い沈默。

一枝　あたくしね、昨日、本棚の整理をしてゐましたら、收の日記を見つけましたの。

老婦人　日記をつけてゐたのかい、あの子……。

一枝　飛び飛びなんですけれどね……。どの日附を見ても、Hがどう云つたの、Hがどうしたのつて書いてありますでせう。Hつて誰かと思ひましたら……。

老婦人　アンリエットのことだらう。

一枝　ええ。あたくし……始めて知りましたの。

間。

老婦人　Pauvre garçon !

長い沈默。

一枝　ちつとも、氣がつきませんでしたわ。（間）——隨分苦しんだらしいんですの。

老婦人　よく默つてゐてくれたよ。——自分でも、いろいろ考へてゐたらう、出來ない相談だと云ふことを……。

一枝　從兄妹同志ですけれどね……。

老婦人　それにしてもさ……。よく默つてゐてくれた……。

一枝　ええ。

老婦人　それに、アンリエットは、あの通り勝氣な娘だから、收にはどうかね。今更、そんなことを云つたつて始まらないけれど……。

一枝　西洋人の血が交ると、ああなるもんですかね。

老婦人　なにがさ。

一枝　いいえ、氣性がね。

老婦人　氣性は、あんた、お父さん似だよ。

一枝　さうでせうかしら……。さう云へば、收もお父さん似ですわね。

老婦人　あんたのとこのは、弟のくせに、誰からでも兄さんと間違へられるほど大人しかつた。やつぱり、早死をする子さ。——さういふことを、つくづく、此頃、思ふやうになつたよ。（ボンボンを一つ口に入れ）どう、一つ……。いいボンボンだよ。

一枝　ありがたう、たくさん……。

この時、奥から、蓄音機で、マスネエのエレジイが聞えて來る。

一枝　どなたか來てらつしやるんですの

老婦人　弘さんだらう。アンリエツトのテニスのお相手でね、なかなかしつかりした青年だよ。

一枝　ああ、何時か、いらしつた、あの元氣のいい……。

老婦人　少し仲がよすぎるやうだけれど、まあ、まあ……（微笑）

一枝　（これも、强ひて、笑顔をつくり）　さうですわ。――なかなかね。

長い沈默。

老婦人　晃も、無頓着なやうで、やつぱり、殘して行つた娘のことは氣になると見えて、今日なんかも、先々のことを、色々相談して來てゐるんだがね。――わたしも先は見えてゐるんだし、かうして手許へ置くのも、少し氣がかりになり出したよ。

一枝　……。

老婦人　その時になれば、どうかなるとは思ふんだが……やつぱりね。

一枝　……。

老婦人　イヴオンヌは、どうしてか日本の氣候に慣れないで、たうとうあんなことになつてしまつたけれど、母親の無い女の子は可哀さうだね。「ありがたう」と「今日は」といふ言葉を覺えに、遙々海を渡つて來たやうなものだつた……アンリエツトのお母さんは……。

一枝　ほんとですわ。

老婦人　今日は、どうしてまた、こんな話ばかりするんだらう。

一枝　あたくしの滅入つた顏を御覽になつたからですわ。來るときは、それは晴れ晴れした氣持で出かけて來るんですのに……。

室内に慌しい足音が聞えると、急に、窓のカーテンが開く。アンリエツトの姿があらはれる。

アンリエツト　ここから御免遊ばせ。あのね、お祖母さま……弘さんが急に大阪へいらつしやることになつたんですつて……。

老婦人　なんだつてさ……。
アンリエツト　どうしてですか。
老婦人　へえ。弘さんに、ここへいらつしやいつて……。
アンリエツト　（走り去る）
老婦人　アンリエツトの顔を見たかい。
一枝　（うなづく）
蓄音機が止る。――弘、アンリエツトと共に現はる。
老婦人　ほんと、大阪へいらつしやるつて……。
弘　（一枝と老婦人に會釋した後）今朝おやぢから云ひ渡されたんです。出し抜けなもんだから、面喰つちまひました。
老婦人　大阪へは、お勤めの口がきまつたんですか。
弘　それもあるんですけれど……。ええ、まああさうなんです。
老婦人　それはおめでたう。會社？　銀行？

弘　さあ、どつちへ廻されますか。はじめ、いろんなことをやらされるらしいんです。
老婦人　實地研究といふわけですね。大阪には、お知合ひがおありになるんでしたね。
弘　ええ、おやぢが心易くしてゐる人で、いろんな事業に手を出してる人なんですがね……。その人のうちへ、まあ、預けられるわけなんです。
老婦人　それで、何時、おたち？
弘　それが可笑しいんです、この月曜なんですつて……。服を作るひまもないんですからね。
老婦人　この月曜つていふと、（指を折り）あと四日ですね。前から、ちつともお話はなかつたんですの。
弘　僕が行くことですか。それが、前から、僕をくれつていふ話だけはあつたんです。
老婦人　おや、お養子にいらつしやるんですの。
弘　ええ、まあ、早く云ふと、さうなんです。
このあたりから、アンリエツトは、今にも泣きだしさうな表情になる。

老婦人　（この樣子を見てとつて）アンリエツト、あつち行つてね、つるやに、お書の用意はどうか聞いておいで……。もうぼつぼつかかるやうにつてね。

アンリエツト　（縛めを解かれた小羊のやうに走り去る）

一枝　失禮ですが、向うのお孃さんは……？

弘　（手眞似で）　これつばかりの子供ですよ。

一枝　でも、あなたが、まだお若いから……。それや、お樂しみですわね。

弘　（笑つてゐる）

老婦人　まだお決まりになつてるわけぢやないんですね。

弘　まあ、決まつたやうなものです。考へたつてしやうがありませんからね。その代り、いやだつたら、何時でも出て來ますよ。

一枝　まさか……。

老婦人　そのお孃さまとは、もう何遍もお會ひになつてるんでせう、きつと……。

弘　二度……三度……でしたかな。だつて、十六なんですよ。

老婦人　可愛らしい奥さまができるでせう。

弘　すぐ結婚しやしませんよ。

老婦人　（笑ひながら）それや、さうでせう、どうしたつて……。

一枝　（笑ふ）

弘　（頭を掻きながら）養子つて、いやなもんですつてね。

老婦人　さうとも限りませんわ。ぢや、なんですね、東京へは滅多に出ておいでになれませんね。

弘　（快活に）出て來ますよ。アンリエツトさんがどうしてるか、見に來なくつちや……。

老婦人　（一枝を顧み）まあ……それは、それは……。

弘　當分は日本にいらつしやるんでせう。

老婦人　ゐますとも……。わたしをはふつて、何處へ行くものですか。ねえ、一枝……。

一枝　（目で笑ひながら、うなづく）

弘　（少しまごまごして）それでも、また、お父さまの御都合で……。

老婦人　あ、それは、どうなるか、わかりません。どうせ、何時か、わたしは、一人きりになるでせう。

一枝　あたくしがゐますわ。（弘に）ねえ。

弘　さうですとも……。

老婦人　一人になるのが寂しいと思つたのは、もう五六年も前のことですよ。

一枝　あたくしなんか、お母さまのやうには、なれませんわ。

弘　僕の母も寂しがりで、今朝から泣き通しなんです。

一枝　やつぱりね、下がおありにならないから……。

老婦人　なあに、子供は親のことなんか考へてやしないからね。

一枝　……。

老婦人　行きたい處へは、さつさと行くし……。死にたい時には、さつさと死ぬし……。

一枝　（寂しい微笑）

弘　いやだなあ、小母さんは、皮肉で、……。

老婦人　（笑ひながら）日曜毎に、テニスをしにいらしつた家を、お忘れになつちやいけませんよ。

一枝　（これも、強ひて笑顔を泛べ）　それから、柿の木から落ちて死んだ男の子のゐた家をね。

老婦人　さう。

弘　（面を伏せ）　忘れません。

老婦人　アンリエツトも、これから、テニスのお相手がなくつて、寂しがるでせう。

この時、突然、窓のかげで、アンリエツトの啜り泣く聲が聞える。一同、その方を見る。

老婦人　（異様に緊張した表情で）　弘さん、それぢや、今日は、お話はこれだけにして置きませう。おたちになる前に、もう一度いらしつて下さい。お別れに、お茶でも飲みませう。アンリエツトは、少し氣分が悪いやうですから、失禮させて頂きます。

弘　はあ、では、御免下さい。いづれ、また……（會釋して去る）

沈默。

老婦人　アンリエツト……（返事がない）アンリエツト……（靜かに起ち上り奥にはひる）

やがて、彼女は、アンリエツトの肩に手をかけ、いたはるやうにして現はれる。

一枝　どうしたんですの。

老婦人　（元の座につき、アンリエツトを膝の上に抱きながら）泣くひとがありますか、そんなことぐらゐで……。

アンリエツト　（恥かしさうに老婦人の胸に顏を埋める。が、何を思つたか、急に、其處を離れて、奥へ逃れ去る。階段を駈け上る足音）

老婦人　（あつけに取られて、一枝と顏を見合せるが、不圖、或る豫感が頭をかすめたらしく、急に席を起つ。しかし、思ひ直して、今度は、足音を忍ばせながら、靜かにアンリエツトの後をつける）

一枝　（獨り取殘された形で、無意識に席は立つたものの、ぼつねんと、二階の上を見上げてゐる）

長い沈默。

暫くして、老婦人が相變らず足音を忍ばせながら現はれる。極度の不安から解放された時の、やや疲れたらしい顏つき。

一枝　大丈夫ですの。

老婦人　なにが？　アンリエツトかい。（それに答へず）やつぱり、いけなかつたね。

一枝　でもね……。さういふもんですわ。

老婦人　（溜息をつき）またかと思つた。

一枝　え？　またかとは……？

老婦人　さうだ……泣きたいだけが泣くがいい。女は……、若い女は、涙と一緒に悲しみを流してしまへるんだからね。

——幕——

三

老婦人
アンリエット
つる
醫師

その年の秋の午後――薬の落ちつくしたポプラ。

窓が開いてゐる。室内は、よくは見えないが、ただ、老婦人が、忙しさうに出たりはひつたりしてゐる様子が見える。

アンリエットの、「お祖母さま、一寸、いらしつて……」といふ聲が二階から聞える。

つるが、家から出たりはひつたりする。

やがて、外出の服裝をしたアンリエットが先に立ち、老婦人、續いてつるが現はれる。

老婦人　（時計を見ながら）まだ少し早いね。今から行くと、一時間も待たなくちやなるまい。

アンリエット　少し早いめに行つた方がいいことよ。叔母さま、五時に向うに行つてらつしやる筈よ。

老婦人　あ、さうさう、お父さんは、お前にキツスをなさるかもしれないから、びつくりしちや駄目だよ。

アンリエット　キツスなんかなんでもないわ。あたし、お父さまがお立ちになる時のこ

と覺えてるの。お髭が痛くつて、どうしようかと思つたわ。お祖母さまはなさらないの。

老婦人　お祖母さんもしたいんだけれど、これは、お父さんの方で、びつくりするだろう。

から云ふと、急に、片手を額にあて、もう一方の手を、アンリエットの肩に支へて、ひよろひよろッと前にのめらうとする。アンリエットと、つるが、慌てて、抱き止める。

アンリエット　お祖母さま、どうなすつたの。

つる　御隱居さま……。

兩人は、老婦人を、長椅子に倚らせる。

つる　お醫者様をお呼び致しませうか。

アンリエット　一寸、電話をかけて……溝口先生のとこね……早くよ……。

つる　（走り去る）

アンリエット　（泣き聲で）お祖母さま、御氣分がおわるいの。何かお藥は……？

老婦人　（力なく手を振る）

アンリエット　（老婦人の額に手をあて）　おつむり、下げていらしつた方がよくはありませんの。

老婦人　（角の立たないほどに）　お前が、あんまりせかすからさ。（間）——心配しないでいいよ。

長い沈默。

アンリエット　あつち、どうしませう。

老婦人　もう少し休んで……。すぐなほるだらう。

つる現はる。

つる　今すぐお見えになります。丁度、お出かけにならうとしてらつしやる處でございました。

老婦人　なに、一寸眩暈がしただけさ。お醫者さんなんか、よかつたのに……。少し喉がかわくやうだから、熱いお茶を一杯入れて來ておくれ。

つる　はい。（去る）

アンリエツト　今日は、いらつしやらない方がよくはないこと？

老婦人　なあに、大したことはあるまい。――わたしが迎ひに行かないつて法はないよ。

アンリエツト　でも、かうやつてると、遅くなりやしないかしら……。

老婦人　うるさい娘だね、大丈夫、時間はあるつて云つてるぢやないか。――お前だけが待ち遠しいんぢやありませんよ。お父さんだつて、お前一人がお迎へに出てゐても、およろこびになりはしないよ。

長い沈黙。

つる、茶を持つて來る。

老婦人　（靜かに、茶を飲む）應接間を綺麗に片づけてね。それから、食堂の電球を取替へておくこと、忘れないでね。

つる　はい。

老婦人　（自分で脈をみながら、獨言のやうに）年を取ると意氣地がなくなるね。――御免よ、アンリエツト。お祖母さんは、今、少し意地の悪いことを云つたね。さうぢやない。お前のお父さんは、お前の顏を見に歸つてらしつたんだ。だから、お前が一番にお父さんの前に出て、「お歸りなさい」つて云ふんですよ。さうしたら、何んておつしやるだらう。お父さんは、先づお前を兩手で抱いて、「よく長い間おとなしくお留守をしてゐたね」つて……。それから、お前の頰をさすりながら、「お母さんそつくりになつた」つておつしやるだらう。（間）つるや、もうここはいいから、早く晩の支度をしておいで……。よしやはまだ歸らないかい。

つる　はい、まだ……。あの人はお使ひが遲いんで困ります。

老婦人　お前だつて早い方ぢやないよ。さ、お醫者さんが見えたら、ここぢやなんだから、上へ上らう（時間を見て）まだ二十分は大丈夫……。（起ち上らうとするが、また椅子に倚りかかる）をかしいね、どうもまだいけない。

アンリエツト　もう少し、このままにしてらしつた方がいいことよ。（外の方を見る）お

苦しいんですの。

老婦人　いいや、かうしてれば、どうもない。――誰か、このまま、そつと、東京驛まで連れて行つてくれるものはないかしら……。

アンリエツト　（面白がつて）椅子ごと？

老婦人　ああ、椅子ごと擔いで……。なんだと思ふだらう、みんな……。

アンリエツト　人がたかつて來るわね。

老婦人　息子の歸りを出迎へに來た、年取つた母親の、慘めな姿だと知れば、笑ふものもあるまい。どら、その襟卷を取つておくれ。

アンリエツト　（老婦人の肩に毛皮の襟卷を着せかける）

老婦人　かうしてると、裾が寒い。何かかけるものを……。

つる　（奥にはひる）

アンリエツト　そんなにお動きになつちや駄目よ。

老婦人　お前も、そこへ掛けたらどう。立つてちや草臥れるだらう（アンリエツトの、帽

子からはみ出てゐる髪の毛を直してやりなどする）お前にこの帽子は一番よく似合ふね。どれ、あつちを向いてごなん。よし、よし……。お父さんに會つたら、なんて云ふの。

アンリエツト　（云ひにくがつて、からだをひねる）

老婦人　なんて云ふのさ。――默つて、さうしてるのかい。

アンリエツト　ほかに澤山人がゐるの。

老婦人　さあ、どうだか……。誰にも知らせなかつたかもしれないね、あの人のことだから……。尤も新聞には出てゐたんだから、歸つて來ることは知つてても、着く時間なんかわかるまいしね。昔のお友達やなんかとは、どうなつてゐるんだか……。

アンリエツト　でも、お父さまは、有名な學者なんでせう。

老婦人　佛蘭西ではね。それが却つて、日本の學界に容れられない理由らしいね。收のお父さんなんかは、あれで、三十そこそこで博士になつたんだけれど、お前のお父さんからは馬鹿にされてゐた。學問の系統が違ふと、ああまで排斥し合はなくつちゃならないのかね。

アンリエツト　牧兄さまのお父さまは、人類學の方でせう。

老婦人　ああ、さうだ。それや、アルケオロオグとしちや、お前のお父さんは、世界でも、第一人者だよ、今ぢや……。

つるが、羽根蒲團を持つて來る。

つる　（それを着せながら）あの、先生がお見えになりました。

老婦人　それぢや、失禮ですが、こちらへつて……。

つる去る。やがて、醫師を案内して來る。

醫師　どうなさいました。

老婦人　（元氣を裝つて）いえ、なんでもないんでございますよ。一寸眩暈がいたしましたの。此間中からの疲れが出たんでございませう。

醫者　ははあ、今日は、いよいよ、お着きの日ですな。今、お出掛けのところだつたんですか。

老婦人　はあ、丁度出掛けようとして、ここまで參りましたら、ふらふらつといたしまし

たものですから、かうやつて、休んでをりましたんですの。

醫師　ここぢや御窮屈でせう。まだ、ふらふらなさいますか。

老婦人　今、ここぢやあんまりだと思ひまして起ちかけたんでございますけれど、なんですか、まだ……。

醫師　（脈をとりながら）ははあ……。

老婦人　何時か、かういふことがあるだらうと覺悟はしてをりましたんですけれど……。

醫師　覺悟は大袈裟ですな。いや、大したことはありません。

老婦人　例のぢやございますまいか。

醫師　いや、いや、それとは違ひます。やはり、輕い腦貧血でせう。大分、お氣をお使ひになりましたらうからな。

老婦人　ええ、もう二度とないことでございますから……。

醫師　お舌を一寸……。は、結構……。（瞼などを見たる後）それでは、お胸をざつと拜見して置きませう、念のために……（胸に聽心器をあてる）たしかなものです。御心配は

いりません。ですが、今日は、安靜になすつていらしつた方いいでせう。

老婦人　無理でございませうか。

醫師　御用心をなさるに越したことはありませんな。私が伺つた以上は、お止め申すより外はありません。

老婦人　少しぐらゐの無理なら……。

醫師　それがいけません。平常、人竝はづれて御養生家でいらしやるのに、今日はまた……。それや、特別のなんでせうが、一つ御辛抱を願ひます（頭を掻きながら）驚きましたな、どうも……、奥さまに、私から、こんなことを申し上げなければならないなんて……世の中も變れば變るものです。

老婦人　から、意氣地がございません、かうなりますと……。

醫師　お察しします。

老婦人　（涙をふきながら）諦めませう。アンリエツト、それぢや、お前、一人で行つておいで……。行けるね。本郷の叔母さまを見つけてね、一緒にお父さまを探してお貰ひ

……。つるやを連れて行くかい。

アンリエツト　いいわ。

老婦人　途中は大丈夫だね、いや、やつぱりつるやを連れておいで。

アンリエツト　いいのよ、お祖母さま。東京驛なら、わかるわ。

老婦人　さうかい。本郷の叔母さまは、婦人待合室で待つてらつしやる筈だからね。時間はまだゆつくりだから、慌てないでもいいよ。

アンリエツト　お父さまは、どんな服を召していらつしやるかしら……。

老婦人　さあ、それはわからない。お前、お顔をよく覺えてないんだね。叔母さまは、いくらなんだつて、覺えてる筈だ。（考へて）ぢやね、かうするといい。――この寫眞を持つて行つて、見くらべてみるさ、汽車から降りる人の顔を一々……（さう云つて、笑ひながら、頸にかけた鎖を外し、アンリエツトの頸にかけてやる）

アンリエツト　（その寫眞を一つ時見つめてゐる）

老婦人　鼻の横に大きなホクロがあるから、それを目標にしてね（醫師に笑ひかけ）丸

で昔の「親を尋ねて」みたいですわね。叔母さまが訊いたら、一寸氣分がわるいのでつて云つておくれ。お父さんにも、出がけに眩暈がして倒れたなんて云つちやいけませんよ。さあ、あんまり遲くならないうちに、出掛けなさい。（つるに）運轉手は、何處かへ行つてやしないかい。

つる　（走つて外に出る）

アンリエット　（いそいそと）行つて參ります。（走り去る）

老婦人　（默つて、それを見送る）

長い沈默。

醫師　お嬢さんを御覽になるのがお樂しみでせうな。

老婦人　倅でございますか。ええ、それや、もう……。年寄なんか、こちらでいくら待つてゐましても……。

醫師　なに、それは、また、別ですよ。

長い沈默。

老婦人　去年の今頃も、先生がかうして駈けつけて下さいました。

醫師　ああ、さうさう……。しかし、どちらも、違つた意味で、私が不必要でしたな。——あの時は、全く、手の下しやうがありませんでした。

老婦人　あたくしが、ここに、かうして、書物を讀んでゐましたんですよ。

醫師　さうでしたか。お驚きになつたでせう。

老婦人　變なものですわね。あの子が——牧つて申しますんですが——柿の木へ登つて柿を取つてゐることは知つてゐたんでございますよ。危いことをする、早くやめてくればいい、さう思ひながら、つい、止めることもせず讀む方にばかり氣を取られてゐたんでございませう。

醫師　よくあることです。たしか、お嬢さんもその場にいらしつたんでしたな。

老婦人　あれが何か、大きな聲で、しきりにあたくしに云ひつけてをりますのが耳に入(はい)

りながら、どうしたと云ふんでせう……あれで、一度か、二度、注意はしたと思ひますんですけれど……。

醫師　どうも怪我といふものは、こいつ、豫め、なんとするわけにも行きませんしな。

老婦人　それがね、後から考へてみますと、ただの怪我ぢやないらしいんですの。こんなこと、申し上げていいかどうか存じませんけれど……。

醫師　いや、それは伺ひますまい。醫者はただ、與へられた場合の處置さへ講じればよろしいのです。立ち入つたお話は、お互のためによくはありますまい。それに、あまり、また、お話が過ぎると、お疲れになりますから……。もう暫く、かうしてゐて、お部屋へお連れしませう。大分、冷えて來ました。

老婦人　あの柿の木は、その後、伐らせてしまひましたの。

醫師　伺ひました。

老婦人　その跡へ、「もつこう薔薇」を植ゑさせましたんですけれど、よくつかないらしいんですの。收といふ子が、あの花が好きでしてね。

醫師　はあ。（脈をみる）

長い沈默。

老婦人　なんですか、胸騷ぎがして……。

醫師　（默つて脈を見つづける）

つるが現はる。

つる　（醫師に）何か御用はございませんですか。

醫師　あ、それぢや、一寸、わたしの家へ行つてね、……いや、伴のものにこれを取りにやつて下さい。（紙片に何か書きつけて渡す）

つる　はい。（退場）

醫師　御氣分は……？

老婦人　少し頭痛が……。

醫師　靜かになすつていらつしやい。すぐよくなります。汽車は、何時ですか。

老婦人　五時三十分……。
醫師　（時計を見ながら）五時三十分と……。
老婦人　間に合ひませうか。
醫師　何がですか。
老婦人　お隠しになつてはいけません。仰しやつて下さい。ほんたうのことを……。
醫師　ほんたうのことと云ひますと……。
老婦人　丁度必要なだけ……。（溜息）
醫師　なにがです。
老婦人　あたくしの命が……。
醫師　御常談おつしやつちやいけません。
老婦人　（苦しさうに）　ここでは困ります。
醫師　ええ、今……。
老婦人　つるや……。

醫師　女中さん……。
つる、急いで現はる。
老婦人　つるや、わたしを、向うへ連れて行つておくれ。
醫師　いや、一寸待つて……。奥さん、なんでもありませんよ。これくらゐのことはざらにあります。
老婦人　それやさうでせう。
醫師　お連れする前に、一寸、カンフルを一本射しときませう。
老婦人　注射ですか。
醫師　必要はあるまいと思ひますが……。
老婦人　そんなら、よしませう。痛い思ひをするだけ損ですわ。
醫師　そんなことおつしやらないで……。
老婦人　そんなら、このまま、ぢつとしてゐませう。
醫師　それだけはつきりなすつていらつしやれば文句はありません。（つるに）お床の用

意は出來てゐるんですか。

つる　はい。

醫師　お二階でしたな（間）それではと……（考へる）何か、下に敷くものはありませんか。もう暫く、このままの方がいいでせう。

つる奥に去る。やがて、クッションを二つ三つ持つて來る。

醫師　それで結構（老婦人の腰の下、肩の下などに敷く）どこか、お痛いところはありませんか。

老婦人　頭が……。

醫師　（脈をとりながら）それは、御心配いりません。平常、ああいふ風に申し上げてあつたものだから、若しやとお思ひになるのでせうが、この通り、心臟はたしかなのですから、決して怖くはありません。動脈硬化も、奥さんぐらゐの程度なら、まだまだ……。（間）お顏色がだんだんよくなつて來ました。（つるに）お宅には、ウヰスキーかなにかありませんか……葡萄酒でもよろしい。

つる　葡萄酒ならございます。

醫師　少しどうぞ……。

つる奥に去る。やがて、葡萄酒を持つて來る。

醫師　（それを老婦人に飲ませる）平生、少しづつ、召上つていらしつたんですな。（瓶を檢めながら）これは、なかなか、上等な品物に違ひない。なんですか……ハ…ウ…テ……サ…ウテルネ……。

つる　オート・ソーテルヌでございませう。

醫師　（つるの顏を見上げ）なるほど、耳學問といふやつで……。

つる　（口を抑へ、聲を立てずに笑ふ。が、急に眞顏になり）御隱居様、お寒くはございませんか。

醫師　さやう、少し、薄いやうですね。もう一枚、何か……。（體溫器を挾ませる）

つる、奥にはひり、別の羽根蒲團を持つて來る。

老婦人　先生はお寒くはありませんか。

醫師　いや、わたしは、太つてますからな。
老婦人　もう何時でございませう。
醫師　今が、きつちり五時です。
老婦人　……。
醫師　折角の日を、どうも殘念でしたな。
老婦人　あたくしは、もう息子を一人失くし、嫁を一人失くし、孫を一人失くしたんですからね。それから、もう一人の息子は、十年間もあたくしをうつちやらかして、旅へ出たまま歸つて來ようとはしなかつたんですもの。それでも、自分の手許には、さきほどのあの孫娘を、世の中にたつた一つしかない寶のやうに、大切に預つて、可愛がれるだけ可愛がつて來ましたのが……それさへ、今日、赤の他人に奪はれてしまふんです。赤の他人も同樣です。それは、旅から歸つて來る倅のことを申すのではありません。もう一人の男です。もう一人の、何處からか、不意に現はれて、あたくしの息子だと云つて、大きな顏をしてゐる男です。

醫師　……。
老婦人　これは自分の娘だ――さう云つて、また、あたくしの手から、あのアンリエットを攫つて行かうとしてゐるんです。あたくしの倅なら、そんなことはしない筈です。ねえ、さうぢやございませんか。
醫師　……。（體溫器を外して見る。首を傾ける。不安らしい表情）
老婦人　あのアンリエットの爲めには、あたくしは、殆ど、一人の男をさへ殺しました。その男とは、やはり、あたくしの可愛がつてゐた孫です。父親を失くして、一生目を曇らせてゐるのかと思はれるやうな、あの寂しい男の子……。このあたくしですよ、あの收を殺しましたのは……。（溜息）
醫師　奥さん。
老婦人　ええ、さうです、柿の木から……。あの柿の木のてつぺんに、アンリエットの心臟が、赤く、ぶら下つてゐたんですもの……。
醫師　奥さん。

老婦人　（殆ど口の中で）頭が……頭が……。

長い沈默。

老婦人　（だんだん興奮狀態になる）　一枝、ゆるしておくれ。お前の、かけがへのない一人息子が、ああまで思ひつめてゐたアンリエツトの目に、その頃から、弘といふ青年が映つてゐた――それから、その青年の方でも、アンリエツトを――かう思ひ込んでゐたわたしが、この春、どんな悲劇を見せられたか、一枝、お前だけは、ちやんと、それを知つてゐるね。

醫師　（老婦人の脈をとる）

老婦人　お前は、その時、牧のことを思ひ出してゐた。さうして、わたしを、例の目で見てゐた。わたしは、この一年間、お前のその目を、どれだけ避けようとしてゐたか。お前は、なんにも知らないといふだらう。誰がそれを知つてゐやう。だが、お前は、やつぱり、母親だもの……。子供の運命については、神の聲を聞くことのできる母親たも

の……。お前は、その敏感な母親の鼻で、わたしの罪を嗅ぎ當ててゐたんだね。

醫師　（益〻不安な表情）

老婦人　（息苦しさうに、しかし、朗らかな聲で）

O Thébains! Jusqu'au juor qui termine la vie
Ne regardons personne avec un oeil d'envie.
Peut-on jamais prévoir les derniès coups du sort?
Ne proclamons heureux nul homme avant sa mort.

長い沈默。

つるが、白い布の包みを持つて、恐る恐る近づいて來る。醫師の手に包みを渡し、何やら小聲で囁く。醫師、うなづく。

醫師　（老婦人の耳許に口を寄せ）大分およろしいやうですから、向うへお連れしませう。

老婦人　お默り……。お前はお父さんと何處へでも行くがいい。お祖母さんは、もう用

のないからだだから、お前たちの邪魔にならない處にゐよう。

醫師　風邪でもお引きになるといけませんからな。

老婦人　アンリエツト……。どうして、お前は、何時までも、そつちを向いてるの。怒つたのかい。何も、そんなに怒ることはないぢやないか。

醫師　（つるに目くばせしながら、老婦人のからだを起さうとする）

つる　（それを、向う側に廻つて、手傳ふ）

醫師　（突然）あ、いけない、いけない。（手を放す。急いで、注射の用意をする）本郷に御親戚があるんでしたな。電話がありますか。

つる　はい。

醫師　あまり、びつくりなさらんやうに……それでも、至急、おいでを願つて下さい。

つる　御病氣だと申し上げてもよろしいんでございますか。

醫師　勿論、さう云つて……。

つる　本郷の奥様は、只今、停車場の方へ、お宅の旦那様をお迎へに行つておいでになる筈でございますが……。

醫師　こちらへ、御一緒に見えるんですか。

つる　さあ、それは……。

醫師　兎に角、お知らせだけしといて……。ほかには別に、お知らせするところはありませんな。

つる　あたくしでは、一寸わかり兼ねますが……。

醫師　よろしい。取敢へずお願ひします。

つる、急いで退場。醫師、注射をする。

老婦人　アンリエツト……アンリエツト……。

醫師　今、すぐ……。もうぢきです。

老婦人　收、何をそんな顔して見てるんです。そんな處に、誰もゐやしないよ。

醫師　（老婦人の脈をとる）

長い沈默。

この頃から。夕日があたりを染め、老婦人の顏に、一種、壯嚴な光を浴びせはじめる。

老婦人　（やや穩やかな調子に復し）　そうら、歸つて來た……。もう少し遲いと、母さんは、お前の顏が見えなかつたんだ。さ、こつちへおいで……。海は荒れなかつたかい。（間）　よく歸つて來てくれたね。あんまり遲いので、母さんは、お前が道に迷つたんぢやないかと思つて心配したよ。まあ、どうしたの、その埃は……。

長い沈默。

みんな揃つたかい。收はどうした、收は……（間）　あ、誰か、早く……。（間）　免しておくれ、みんな、免しておくれ……。わたしは、ただ、少し、長生きをしすぎただけだ……。ただそれだけだ……。

日が沈み終つて、舞臺、次第に暗くなる。

――幕――

百三十二番地の貸家　（二場）

一

毛谷　啓
同　京子
宍戸第三

二月上旬の午後

東京近郊の住宅地――かの三間か四間ぐらゐの、棟の低い瓦家――「貸家」と肉太に書いた紙札が、形ばかりの門柱を隔てて、玄關の戸に麗々しく貼つてある。

その門の前で立ち止つた夫婦連れ、結婚後三四年、今に今にと思ひながら、知らず識らず生活にひしがれて行く無産知識階級の男女である。

毛谷　この家だらうね。

京子　さうでせう。

毛谷　番地が書いてないね。

京子　これですよ。大家さんは何處か聞いてみませう。

毛谷　同番地としてあつたんだから、その隣がさうかも知れないね。表札を見て來てごらん。宍戸（ししど）だよ。

京子　（歸つて來て）違ひますわ。そいぢや、向うかしら……。

毛谷　どら、おれが見て來よう。

京子　さうぢやなくつて？　若しかしたら、裏かも知れないわ（裏へ廻らうとする）

毛谷　待て、待て。一寸、外側だけでも見てからにしようぢやないか。庭は、これで澤山だね。

京子　さうね。市中のことを思へばね。

毛谷　これが、八疊と六疊かな。便所がそこと……。日當りは好ささうだね。

京子　それやもう……。あたし、お豪所さへ氣に入つたら、すぐにでも借りますわ。

毛谷　さうまあ急ぐなよ。しかし、今日は草臥れた。

京子　でも、散歩だと思へば、なんでもないぢやありませんか。少し曇つて來ましたけれど、お天氣だつて、二月にしちや、上出來ですわ。

毛谷　お天氣は上出來でも、この道は少しひどすぎるよ。どうかならないもんかなあ。さうすると、玄關と、もう一間あるわけだね。三疊か四疊半だらうね。なるほど……これならいいや。

京子　停車場だつて、さう遠くはないでせう。今日はずゐぶん廻り路をしたからですけ

れど……。

毛谷　三十五圓ていふところだらうな。

京子　さあ、話し次第では三十圓にするでせう。

毛谷　間部のうちが、あれで、四十圓だからね。尤も、場所が場所だ、あそこは……。

　元來、店に建てた家だからね。

京子　兎に角、大家さんに話してみませうよ。

毛谷　なんて話すんだい。

京子　その前に、中を見せて貰はなくつちや、あなた……。

毛谷　あ、さうか。隣で訊けばわかるだらう。

　（この時、裏から、宍戸第三、薪を割る鉈を持つて現はれる）

宍戸　あなた方、何か御用ですか。

毛谷　はあ、實は、この家を見たいんですが、……。

宍戸　あなた方がお住ひになるんですか。

毛谷　さうです。僕達夫婦きりです

宍戸　お二人きりですね。

毛谷　二人きりです。

宍戸　あとから、どなたか外においでになるやうなことはありますまいな。

毛谷　今の處、ありません。

宍戸　お子さんは……？

毛谷　子供は、まだありません。だから、二人きりですよ。

宍戸　近々お出來になるやうなことはありませんか。

毛谷　さあ、それは保證出來ませんな。子供が出來ちやいけないんですか。

宍戸　お出來にならない方が結構ですな。

毛谷　僕達もその方が結構なんですが、あなたは、お子さんは……。

宍戸　わたしには、子供なんかありません。五年前に、女房と別れてから、ずつと獨り暮しですが、子供がなくつ仕合せです。御商賣は……？

毛谷　會社へ勤めてゐます。（名刺を出す）かういふものです。
宍戸　なるほど……。失禮ですが、月給はいくらお取りですか。
毛谷　さういふことまでお話ししなくちやならないんですか。
京子　あの、宅では、月給だけをあてにして暮してゐるんぢやございませんの。ですから、お家賃の方も……。
宍戸　いや、さういふつもりで伺つたのぢやありません。わたしも、この家を人様にお貸ししてはゐるやうなものの、その上りだけで暮してゐる男ぢやないのです。高が、三十圓や四十圓、と云つたところで、そのうちの幾分は、暮しのたしにすることはしますが、三十圓が二十五圓になつても、それや、かまはないのです。
毛谷　お家賃は……。
宍戸　それがですな。わたくしの方は、お貸しする方の收入に應じて、頂けるだけ頂く方針なんで、つまり、原則として、收入の四分の一だけ……。
京子　四分の一つて申しますと……。

毛谷　百圓の收入なら二十五圓と云ふわけですな。
宍戸　さやう。處で、今、奥さんのお話では、月給の外に、收入がおありのやうですから、さういふお方は、やはり、その全收入の四分の一……。
毛谷　いや、實は、僕達としましても……。
宍戸　二百圓なら五十圓、五百圓なら百二十五圓……。
京子　まあ……。
宍戸　それでいいわけぢやありませんか。ねえ、それで高いとお思ひになるなら、ほかの家をお借りになればいいわけでせう。
毛谷　それやまあ、さうです。
宍戸　その代り一旦お貸しした上は、わたしも、うちの者同様に思つて頂きたい。お役に立つことならなんでもします。今もこの通り薪割りをしてゐたくらゐで、まだ力仕事なら若いものに負けません。それに、晩なんかは、なんにもすることがなくつて、ぶらぶらしてゐますから、芝居や活動にいらつしやる時は、お留守番を仰せつかります。此

の邊は、わりに物騷ですから、家を空けておいでになることはよくない。

毛谷　ここは、百三十二番地ですね。

宍戸　さうです。新開で御覽になりましたか。今日は、これで三組、あなた方のやうな若い御夫婦が、家を見に來られました。この家を建ててから七年になりますが、最初の二年、自分で住んだきりです。あとの五年間は、ずつと人に貸してありました。それがみんな、若い御夫婦ばかりです。一番はじめが軍人さんで、今臺灣に行つておいでになる鬼頭さん。その次が、これは、わたしの眼鏡違ひで、飛んだ奴に借りられてしまつたのですが、なんでも、小說を書いてるとか書いてないとかいふ青瓢簞。その鼻といふのが、また、髮をかう、お河童さんにしやがつて、風呂敷のやうな洋服を着てゐるんですから、なんとも、はや、お話にならん。これは半年で逐ひ出しました。その次が、先達までおいでになつた大學の先生で、それ、何と云ひましたつけな……。

毛谷　さあ。

宍戸　いえ、つまり、その英語みたいな本をね、ビール箱に三つも持つておいでした。

若い、可愛らしい奥さんと一緒でね。仲がいいにもなんにも、朝起きると、二人で、もう歌を唱ふんです。わたしも、たうとう、その歌を覺えちまひましたよ。「戀はやさしき野邊の花よ……」

京子　ほんとに、まあ、お上手ですわ。

宍戸　チエツ、素晴らしい夫婦もあればあるもんですよ。それがどうでせう。わたしは、一日に一度、その御夫婦のお顏を見ないと、夜、眠られなくなつてしまつたんです。弱りましたな。別に、毎日、用があるわけぢやなし、なに、用さへ作れば、一とまたぎの處にゐるんですが、大家なんていふものは、これで、肩身の狹いもので、うつかり顏を出せば、煩さい、何しに來た、といふやうな目で見られる。それでも、どうかして、二人のお顏が見たい。話聲が聞えるとぢつとしてゐられない。家の中が靜かだと胸がドキドキする、と云つたやうな風に、もうかうなると、見映も外聞もなくなる。「御免下さい。つまらんものですが、お一つ」と、煎餅を一袋、干柿を一串、毎晩のやうに持つて行つたもんです。

毛谷　お話中ですが、家の中を一寸見せて頂けますまいか。

宍戸　はい、只今。わたしは、もと、鐵道院に出てゐましたのですが、少しばかり金を蓄めて、役をまあ退いたやうなわけですが、その金で、第一にこの家を建て、細々ながら恩給で暮して行くつもりでゐたのです。處が、不意に、女房に死なれて、なんの樂しみもなくなつたものですから、自分は、裏の空地に、バラツクのやうなものを作つて、其處に住み、この家は、まあ、氣持のいい方にお貸しして、何かと面倒を見てもあげ、早く云へば、鷄でも飼ふやうなつもりで、餘生を送れば、いくらか氣も紛れるだらうと思ひましてね。

京子　あたくしたち、少し急ぐんですけれど……。

宍戸　（帶の間から鍵を出し、戸の錠を外し）さあ、どうぞ……。掃除はちやんとしてありますす。疊替も、この春にしたばかりですから……。

一同、家の中にはひる。

毛谷　この家は、何時から空いてゐるんですか。

宍戸　つい、先達、空いたばかりです。

毛谷　先達と云ひますと……。

宍戸　つい、この間です。

毛谷　しますと……。

宍戸　十日ばかりにもなりますか……。

毛谷　それにしちや、なんだか、埃つぽいですね。

宍戸　この邊は、埃がなかなかひどいですからな……。なに、すぐに掃除はできますよ。

（緣側の雨戸を繰る）

毛谷　（天井を見ながら）十日ぐらゐぢやありますまい。

宍戸　さあ、それとも、一月にもなりますかな。なにしろ、今年になつてからですから……。

毛谷　大分住み荒してありますね。

宍戸　それと云ふのが、お二人とも、暢氣な方で、わたしが、たまに、お留守中、掃除

をするくらゐなものですから……。

毛谷　襖なんか、ひどく破れてますね。

宍戸　それがですよ。お二人で、鬼ごつこをなさるんですからね。この六疊を茶の間にして、八疊を、客間兼書齋といふ風に使つておいでした。おやすみになるのも、やはり八疊で……。わたし共は、北枕といふことは決してしませんが、お二人とも、こつち枕でしてね、こつちが北です。

京子　夏は涼しいでせうかしら……。

宍戸　ええ、それや、もう……。こつちの窓を明けておやすみになれば……。そこが、わたしの住居ですが、ですから、用心は大丈夫です。

毛谷　前の人は、夏、窓を明けて寢てたんですか。

宍戸　蒸し暑い晩なんかは、さうしないと、眠られないなんておつしやつてね。なに、用心は大丈夫ですよ。さういふわけで、折角お馴染になつてゐましたのに、なんでも、お國からお母さんやなにかをお呼びになるんで、ここでは狹すぎるつておつしやつてね。

目黑の方へお越しになつたものですから、どうかして、この次にお貸しする方も、前のやうな方をと思ひましてね。今まで、澤山、見に來た方も、こつちから、お斷りしたのが多いやうなわけで……。

毛谷　ぢや、僕達は及第したわけですか。

宍戸　まあ、かう云つちやなんですが、お二人とも、お人柄のやうだし……。

京子　なかなか、お口がうまくつていらつしやるわ。

宍戸　なにしろ、こればかりは運でしてね。こつちがいくらいいと思つても……。

毛谷　向うで氣に入らなければね。

宍戸　さやう。向うでいいと思つても、こちらで眞平といふのがあつたりして……。

毛谷　この家は、これで、建坪はいくらです。

宍戸　十八坪半です。便所が寢られるくらゐ廣いんです。

京子　この三疊は何に使はうかしら……。

宍戸　簞笥なんかお置きになつちや如何です。前の方は、さうなすつておいでしたよ。

なんでも、奥さんのお里が、大分いいらしい様子で、箪笥なんか立派なものでしたな。ここの處に衣桁があつて、始終、目の覺めるやうな着物が、取替へ引替へ掛かつてゐましたつけ……。それから、ここに鏡臺が置いてありましたな。奥さんが、朝晩、丹念にお化粧をなさる。それを、あつちから、旦那さんが見てをられるんです。時々、紙を丸めて、奥さんの肩にぶつけたりなんかなさるんですよ。ははははは。

京子　いやですわねえ。

毛谷　どうしよう。

京子　さあ。

宍戸　どうか、わたしには御遠慮なく、いろいろ、御相談をなすつて下さい。御都合で、お家賃の方は、どうにでも、なにしますから……。どうせ、かうして空いてるもんですし……。なに、十圓や十五圓、どつちになつたつてかまやしません。

京子　でも……。

宍戸　わたしはね、同じことなら、あなた方のやうな、若い御夫婦にはひつて頂きたいんです。第一、陽氣でさね。

毛谷　駄目ですよ、もう、僕たちぢや……。

宍戸　そんなことはありません。失禮ですが、おいくつです。

毛谷　（笑つてゐて答へない）

宍戸　奥さんは……？

京子　そんなことをお聞きになつて、どうなさるんですの。

宍戸　いや、兎に角、あなた方の時代は花ですよ。わたしもね、これで、鐵道院に勤めてゐます頃は、それ、よく、旅行をしませう。旅先では、どうしたつて、やあ、なんのかんのと云つて……。

毛谷　それでは、よく考へてお返事をすることにしませう。

宍戸　はあ。

毛谷　どうもお邪魔しました。

宍戸　ぢや、どうか一つ、よくお考へになつて……。

京子　御免下さい。

兩人、外に出で、門のところから、それぞれ家を振りかへる。穴戸は、戸締りをし始める。

毛谷　うるさい大家もあつたもんだなあ。

京子　寂しいのね。

毛谷　前にゐた奴つていふのは、よつぽど、だらしがない奴と見えるね。

京子　何もかも、あけすけなのね。だけど、よく見といたものね、いろんなことを……。いやな、お爺さん。でも、家は、氣に入つたわ。あなたは、どう。

毛谷　家賃をいくらにするのか知らないけれど、あの調子ぢや、二十五圓ぐらゐにしさうぢやないか。

京子　さうよ、さうなら、隨分、安いわ。

毛谷　安いさ。惜しいやうな氣もするな。

京子　ね、さうでせう。いくらか、聞いてみるだけ聞いてみといたら？

毛谷　うん。しかし、來て見て、ああ煩さく附き纏はれちや、やりきれないね。

京子　こつちが相手にしなければいいんだわ。留守番なんか頼むからいけないのよ。あたしたちは、外へだつて、そんなに出ないんだし、世話になることなんか、ありやしないわ。

毛谷　それもさうだ。兎に角、聞くだけ聞いといてみよう。（引返す。玄關に出て來る穴戸に）あのう……若し、拜借するとして、家賃の方は、いくらぐらゐにして頂けるんですか。それを伺つとかないと……。

穴戸　さやうですな。まあ、一つ、その邊は、適當に御相談しようぢやありませんか。今までのお宅は、どういふ風で……？

毛谷　今までは、これと同じくらゐの廣さで、三十圓出してゐたんですが……。

穴戸　どちらですか。

毛谷　市内です。

穴戸　市内は、どちら……？

毛谷　あの……日暮里です。
宍戸　日暮里……？　ぢや、まあ、この邊と同じやうなもんですな。それぢや、三十圓といふことにしようぢやありませんか。
毛谷　ですけれど……。
宍戸　いえ、それでかまひません。さつきも云ひましたやうに、十圓や十五圓は……。
毛谷　ですから……。
宍戸　まあ、まあ、さうして置いて、疊ぐらゐをそちらで持つていただけば……。
毛谷　いえ、さうぢやないんです。こつちもまだ薄給の身ですし……。
宍戸　いくらお取りですか。
毛谷　九十圓ばかりしか取つてゐません。
宍戸　それに、一方の御收入が……。
毛谷　いや、あれは、實は、家内の方の何でして、今月からは、當にできない事情があるもんですから……。

宍戸　よろしい。それぢや、二十五圓にしませう。その代り、考へた上でなんておつしやらないで、いますぐに、決めていただかうぢやありませんか。別に、お考へになる餘地はないでせう。奥さんも御一緒なんだし、奥さんは、大分、氣に入つておいでのやうですな。
毛谷　いや、さういふわけでもありませんが。家賃さへ安くしていただければ、と云ふんで……。
宍戸　二十五圓は安いでせう。
京子　（近づき）どういふお話なんですの。
宍戸　二十五圓でも高いとおつしやるんです、旦那さんは……。
京子　それで、敷金の方はどうしたら、よろしいんでせう。
宍戸　あなたの方は、どういふ御都合ですか。
京子　あの、でも、おつしやつて頂いた方がよろしいんですの。
宍戸　ぢや、敷金なしとしませう。

京子　あら。

毛谷　さうですか。

宍戸　今晩からでもいらつしやい。わたしは、今から掃除にかかります。

京子　一寸、それぢや、もう一度、よく見せて頂きますわ。

毛谷　なあんだ。

宍戸　どうぞ、どうぞ……（また鍵を外す）

京子　（はひりながら）お臺所がどういふ風になつてましたかしら……。

宍戸　これで、家賃を取るために家を貸してゐる人は知りませんが、わたしなんかのやうに、樂しみに人を置いてるものには、年寄りがゐて念佛を唱へたり、子供にギヤアギヤア泣かれたりしては、全く引合ひませんからな。出來ることなら、あなた方のやうな、新婚の夢まどらかな若夫婦で、それも……。

毛谷　僕達は、もう新婚ぢやありませんよ。

宍戸　いや、それにしても、まだ世のなかの苦勞にはそれほど揉まれておいでにならん

でせう。

毛谷　どうして、どうして……。

宍戸　つまり、夫婦が顏を合はせても、きつと何かしら云ひたいことのある時代、お互に、飽かず感情の火を點し合つてゐる時代、さういふ時代の御夫婦に、わたしは、この家をお貸ししたいんですよ。その御夫婦の生活が、云はば、今のわたしの、ほんたうの生活なのかも知れません。

毛谷　（出て來た妻に）どうだい。兎に角、一度歸つて相談することにしよう。

京子　さうね、でも……。

宍戸　お決め下さるなら、早い方が結構です。手附もなにもいりませんから、お約束だけなすつて置いて下さい。

京子　ぢや、折角ああおつしやつて下さるんですから、さうしたら、どう？

毛谷　さうだね。そんなら、明日は日曜だから、早速なにするとして……。（小聲で妻に話しかけ、紙入から紙幣を取り出し）ぢや、兎に角、これだけお渡ししときます。

宍戸　いや、そんなことはなさらんでよろしい。男同志がお約束をしたんですから、明日來て下さりさへすれば、そんなものは頂いても頂かなくつても同じことです。

毛谷　そんなら……（紙幣をしまひ）明日、間違ひなく……。

宍戸　（さつきの名刺を更めて見たる後）毛谷啓さんですな。よろしうございます。（戸の鍵をかけかける）

毛谷　どうも、お邪魔しました。

京子　御免下さい。

宍戸　あ、では、お待ちしてゐます。これから、早速、疊を拭きませう。（家のなかにはひる）

毛谷　どうも少し、變だね、あの大家は……。

京子　今時珍しいわね。でも、敷金なしだとすると、百圓浮いて來るわね。

毛谷　あれは無いものとしとかなくつちや駄目だよ。

京子　無いものと思つて、洋服をお作りになつたら……、今度こそ……。

毛谷　それはさうと、鷄を飼はう、鷄を……

兩人の姿が消える。

二

目羅　冥
同　宮子
宍戸第三
甲斐加代子
婦　人

その翌日――夕刻

貸家札が剝がしてある。雨戸が開いてゐる。箒とハタキとを肩にかついで、シャツ一枚の宍戸第三が縁側に腰かけてゐる。

表札――それは竝外れて大きな表札、「毛谷啓」としてある。

家の中には、勿論、道具らしいものは、一つも置かれてない。

そこへ、通りかかつた一組の夫婦、毛谷夫婦より、一層生活の疲れが見える男女、この光景をいぶかしげに見てゐるが、やがて、男が聲をかける。

目羅　この家は、もう塞がつたんですか。

宍戸　塞がりましだ。いや、それと云ふのが、まだなのです。何か御用ですか。

目羅　此處は百三十二番地ですね。實は昨日新聞を見て來たんですが、まだ空いてるなら、一寸、中を見せて頂けませんか。

宍戸　お住ひになるのは、あなた方ですか。

目羅　ええ。

宍戸　お二人きりですか。

目羅　實は、家内の妹が國からやつて來ますので、少し廣い家を借りたいと思ひまして……。

宍戸　すると、お三人ですね。で、その妹さんとおつしやるのは、お若い方ですか。

目羅　家内と四つ違ひです。

宍戸　なるほど……。學校をお出になつて、嫁入口を探しにおいでになるわけですな。

宮子　いいえ、上の學校へはひりますんですの、女子大學へ……。

宍戸　女子大學へね。（考へて）奥さんのお妹さんですね、こいつは、一つ、お斷りしませう。

目羅　どうしてですか。

宍戸　わたしは、なるだけ、夫婦つきりのお方にお貸ししたいのです。でないと、三角關係は、どうもややこしくつていけません。いや、そんなこともおありになりますまいが、若し間違ひでも起ると、これで、わたしが第一心配しなくちやならんですからなあ。

年を取つてから、目のあたり、人間の爭ひを見せられるのはかなひません。

宮子　まあ、そんなことを心配してらつしやるんですか。宅に限つて……。

宍戸　お宅に限つてと、奥さんはおつしやるが、わたしは、これでまだ耄碌はしてゐません。しかし、ここで一度悲しみに遭へば墓の中までその悲しみを背負つて行かなければならない年なんです。うつかりしたことはできませんよ。（着物を着はじめる）

目羅　ぢや、どうしても駄目なんですか。

宍戸　御商賣は……？

目羅　役所に勤めてゐます。

宍戸　お役所は……。

目羅　鐵道の方です。

宍戸　へえ、鐵道の方……？それぢや、まあ、お上りなさい。これが六疊と八疊、玄關が二疊で、そこは三疊です。廣い便所がついてゐます。鐵道は、どちらです。

目羅　本省にゐます。（上る）

宮子　（續いて）まあ、この襖は、どうしたんでせう。

宗戸　わたしも、鐵道院にゐたことがあります。それぢや、まあ、同僚といふ處でさ。

一同奥に袂を消す。この時、二十前後の女學生風の女が、あたりを見廻しながらはひつて來る。

加代子　姉さま、姉さま。

宮子　まあ、早かつたのね。どうしたの。

加代子　都留さんてばね、姉さまや兄さまを連れてらつしやいつていふの。今日は家を見に來たんだからつていつても、お母さんと一緒になつて、どうしても連れて來いつて聞かないのよ。どうなさる？

宮子　さうね、困るわ、あたし……。

加代子　ねえ、あんな立派な家、あたしも、上るのいやだわ。行かなかつたらよかつたわね。番地があんまり近いもんだから、つい、訪ねてみる氣になつて……

宮子　いいわよ、あなたは、これからお友達になる方なんだから……。どう、この家……。三疊があなたの勉强部屋よ。

加代子　あら、三疊なの。

宮子　澤山よ、それで……。

加代子　ぢや、姉さまのお部屋は？

宮子　姉さんの部屋つて、別にないわ。お茶の間があるつきりよ。

加代子　つまらないわ。めいめいのお部屋がなくつちや……。

宮子　そんな贅澤云つて、あなた……。これでいくらだと思ふ、家賃……。

加代子　知らない。二十五圓……。

宮子　常談云つちや駄目よ。四十圓よ、すまないけど……。

加代子　まあ……。そいで決めたの。

宮子　さあ、まだ兄さまが、なんておつしやるか……。多分決まるでせう。

加代子　ここへ、白いカーテンをかけるのね。春になつたら、草花を植ゑませうね。このお座敷は、明るくつて、いいわ。兄さまがいらつしやらない時は、あたし、此處で御

本を讀んでもいいでせう。

宮子　それや、かまはないわ。

加代子　あつちは、三疊は、寢るだけよ。

宮子　ずるいわね。

加代子　あたし、額は、みんな、こつちへ掛けよう。ミレエの「晩鐘」は、どこがいいかしら……。少し陰になつてるとここがいいんだけれど……。

宮子　何處へでも好きなところへお掛けなさい。あたしは、日向ぼつこさへ出來ればいいんだから……。

加代子　さうよ、姉さまは、火鉢の火が消えないやうに氣をつけてらつしやればいいの。それと、お座敷へ着物を脱ぎつぱなしにしつこなしよ、これから……。

宮子　うるさいわよ。そんなことばかり云つてないで、あなたのお部屋を見て來たら……？

加代子　いいの、どうだつて、そんなとこは……。それより、この襖は取り替へるんでせう。どういふ模樣にするの。あたしに擇らして下さらないかしら……。

この時、奥より、目羅、續いて宍戸が現はれる。

宍戸　奥さんが、朝晩丹念にお化粧をなさる。それを、あつちから旦那さんが見てをられるんです。時々紙を丸めて奥さんの肩に……。

目羅　ああ、さうですか。どうも少し氣に入らない處がありますから、折角ですが、ほかを探しませう。

宍戸　何處がお氣に入らないんですか。

目羅　それを云つても仕方がありますまい。おい、行かう。

宮子　やつぱり、いけないんですの。

目羅　いけない。

加代子　あら、どうして？

宍戸　家賃の點なら、もう少し引いて差上げてもよろしいですよ。

目羅　いや、それには及びません。どうもお手間を取らせました。（外へ出る）

宍戸　ポンプを取りつけるのはわけありませんよ。

目羅　（どんどん出て行く）

宍戸　（宮子の前に立ち塞がり）　ねえ、奥さん、大概のことなら、我慢をなすつて、一つ、はひつてみて下さいませんか。御不自由なことがあれば、云つてさへ下されば、何時でも御要求に應じます。わたしは、金儲けに家を貸してゐるんぢやないんです。これはおわかりでせう。この家に住んで下さる方がないことは、わたしに取つて、ただ一つの樂しみを奪はれてゐることです。それも、どんな方でもいいなら、文句はありません。あなた方のやうな御夫婦、殊に、かういふお嬢さんを加へて、若々しい三つの命が、わたしの建てた家の中で、健やかに育つて行くのを見るのは、全くうれしいのです。家賃なんかいりません。明日から來て下さい。いや、今晩からでもよろしい。

宮子　（夫の方に）ねえ、あなた……。（妹に）一寸、兄さまを呼んで來て頂戴。

宍戸　無理を申してすみませんが、わたしは、もう、この人ッ氣のない家を、この上見てゐるのは苦しいんです。あなた方になら、只でお貸しします。はひつてさへ下されば

鏑一文、頂かうとは思ひません。

宮子　（夫が戻つて來ないので、その後を追ひながら）　ねえ、あなた……。ああまでおつしやるんだから……。

目羅　おい、あいつの目を見ろ、目を……。

宍戸　（垣根の中から）ぢや、家賃は、二十五圓にして置きます。敷金はいりません。それならどうです。

三人は、それには答へず、さつさと行つてしまふ。

宍戸　（しばらくその後を見送つた後）　馬鹿な奴だなあ。こんな安い家が何處へ行つたつてあるもんか。

この時、四十前後の婦人が、その前を通りかかる。

婦人　一寸、お尋ねいたしますが、百三十二番地の宍戸さんつておつしやるお宅はどの邊でございませうか。

宍戸　わたしが宍戸です。家を見においでになつたんですか。

婦人　はい、御手數ですけれども……。
宍戸　いや、いや、決して……。では、あなたですか、おはひりになるのは……。
婦人　はい。わたくしなんでございます。
宍戸　御家族は？
婦人　わたくしと下女一人、それきりでございます。
宍戸　なるほど……。それは結構で……。いや、若い御夫婦などにお貸しすると、家を臺なしにされましてな。あなた方のやうなお方、しかも、女中さんまでおありになるといふのでは、わたしの方では、一番有り難いわけなんです。ほかに、お子さんなどは、おありにならないんでせうな。
婦人　はあ、それもお話をすれば長くなりますが、一人娘がをりましたんですが、今一寸、事情がございまして、わきへ參つてをりますんで……。
宍戸　いや、御事情は略ゞお察しします。で、失禮ですが、お連れ合ひは……。
婦人　それが、ある事情から、別になつてゐるんでございますが……。

宍戸　ははあ、すると、なんですか。やはり時々……。
婦人　はあ、いえ、まあ、さういふわけなんでございます。

長い間。

宍戸第三は、ここで頗る困惑の體である。決斷を急がうと思へば思ふほど、思案に迷ふのである。

婦人　お差支へございませんければ、一寸、中を見せて頂きたいんですが……。
宍戸　ええ、それやもう……。（先に立つて歩き出す。相變らず考へ込んでゐる）
婦人　お家賃は……。
宍戸　わたしも、五年前に家内を失くしましてね、今、實は、この裏に、一人で住んでゐるんですが……。いやはや、お話になりませんでございますか。
婦人　まあ、さやうですか。お子さまもおありにならないんでございますか。
宍戸　家内がをります頃は、この家に住んでゐましたんですが……。どうか、お上り下

さい。

婦人　はあ、有りがたうございます。なかなかいいお間取りでございますね。これで、おいくらに……。

宍戸　今までをられた方は、若い御夫婦でしたが、それや、實によく出來た方でしてね。

婦人　さういふ方は少うございますわね。

宍戸　全くです。

婦人　あの、失禮でございますが、お家賃の方は……。

宍戸　なあに、いくらだつてようございますよ。（しみじみと）長くゐて下さりさへすれば、二十五圓でも三十圓でもかまひません。わたしも、これで、お上から頂戴するものもあるししますから、別に、家賃をあてにして、どうかうと云ふわけぢやありませんのでね。

婦人　この邊は物騷ぢあございませんかしら……女ばかりで……。

宍戸　いや、その御心配は御無用です。（窓を開け、外を指し）あそこが、わたしの住ひです。すまひと云ふほどのもんぢやありませんが、雨風をしのぐだけにはしてあるんで

す。あそこにゐれば、この家のなかの物音は、手に取るやうにきこえます。いざと云へば、この窓から……なに、そんなことはめつたにありませんよ。ですが、まあ、安心して、おやすみになれるわけです。ここへお寢になりますか。それとも、六疊になさいますか。

婦人　さあ……その邊のことは、またいづれ……。

宍戸　なにね、そんなことも伺つて置けば、また何かの役に立つと思ひましてね。道具類は澤山おありでせうな。

婦人　いいえ、大して……。

宍戸　それぢや、この押入は夜具だけになすつて、細かいものは、六疊と三疊に半間づつの押入がありますから……。

婦人　この唐紙は……。

宍戸　どうしませう。張替へませうか。

婦人　さう願へれば……。

宍戸　なに、わけはありません。ぢや、何時から、おいで下さいますか。

婦人　一度歸つて、相談いたしませんと……。

宍戸　御相談……。はあ……。然し、なんですよ、いろんな方に相談をなすつたところで、結局、あなたがお住ひになるんですからな。いや、かまひません。どなたにでも御相談なさい。わたしはね、人から相談を受ければ、どんな心配でもしますが、ほかの人に相談されることは大嫌ひなんです。わたしの家内にも、時々、さういふ癖がありましたよ。どうもこれは、女の、よくない癖です。

婦人　（あつけに取られて、下駄を履く）

宍戸　もうお歸りですか。もう何も、おつしやることはないんですか。それぢや、おわかりになりましたね。

婦人　はあ、わかりました。どうも、お邪魔さま……。

婦人這々の體にて、逃れ去る。

宍戸　（部屋中を歩きまはり）わかつとらん、あの女……わかつとるもんか。（そつと、襖の隙間から、次の間を覗く。それから、また、忍び足で緣側の方へ來る）

――幕――

留守（一幕）

中流家庭の茶の間――奥の障子を隔てて臺所――衣桁には、奥さんの不斷着が、だらしなく掛かり、鏡臺の上には、化粧品の瓶が、蓋を開けたまま亂雜に竝んでゐる。

女中のお八重さんが、長火鉢にもたれて、講談本を讀んでゐる。

臺所で、「御免下さい」といふ女の聲。

お八重さん　（起つて行き）あら、もう、後じまひすんだの、早かつたのねえ。御覽なさい、あたしはまだ、そのままよ。どうせお歸りは遲いんだから、何時だつてできるわ。お上んなさいよ。そんなとこに立つてないで……。

女の聲　ぢや、上らして貰ふわ。まあ。……。（と云ひながら、茶の間にはひつて來る。お隣の女中おしまさんである）

お八重さん　一寸、見て頂戴……だらしのないことを……。

おしまさん　あんた？

お八重さん　いいえ、奥さんよ。

おしまさん　うちの奥さんは、それや几帳面よ。鏡臺なんか、女中にはいぢらせないの。こんな風ぢや、箪笥の鍵だつて、かけてかないでせう（かう云ひつつ、箪笥の抽斗を引張る。果して、抽斗が開く）

お八重さん　こら、こら、なにをする。

おしまさん（流石に、恥ぢて、抽斗を閉める）

お八重さん　さ、ここへお坐んなさい。（座蒲團をすすめる）

おしまさん（坐つて長火鉢の縁をなで）　しやれた火鉢だね。うちのより上等だ。

お八重さん　手入をしないから駄目だよ、お金ばかりかけたつて……（茶器を取り出し、茶をついで出す）　何をうろうろ見てるのさ。

おしまさん　ううん、何か珍しいものはないかと思つて……。

お八重さん　いま、色々見せるよ。あんたんとこは、何時に歸るの、今日は。

おしまさん　夕飯を何處かで食べて來るつて云つてたよ。奥さんがまた、洋食かなんか

ねだるのさ。旦那さんは、鰻が好きなんだよ。

お八重さん　あら、うちのもさうだよ。今日は、だけど、餘所でおよばれなんだつて、……。あんた、知らない、そら、よく來る天婦連れさ、奥さんの方が背が高い……。あれ、畫かきだつて云ふけど、さうは見えないね。

おしまさん　知らないよ、そんな人……。

お八重さん　知らないことがあるもんですか。よく、大きな聲で笑つてるぢやないか。

おしまさん　お前さんとこは、みんな大きな聲で笑ふから、誰が誰だかわかりやしない。

お八重さん　さう云へば、あんたんとこは笑はないね。

おしまさん　可笑しいことがないんだもの。

お八重さん　可笑しいことがないつていふのは、不思議だね。お茶が冷めるわよ。さうさう、あれを出さう。（ブリキの鑵から、鹽せんべいを出し、二つほど、おしまさんの膝の上にのせる）

おしまさん　かまはないで頂戴。

お八重さん　今月から、また一圓上げて貰つたわよ。
おしまさん　ぢや、十六圓だね。この近所で十四圓なんてとこは、あんまり無いよ。お
　かずでもよけれやだけど……。
お八重さん　そこは、うちの奥さんはわかつてるよ。昨夜も半襟をくれたよ。（起つて行
　つて、かけ古しの半襟を持つて來る）　これでそんなにかけてないんだよ。
おしまさん　（一寸手に取つて見るが、さほど興味を惹かれぬらしく）　寒いだらう、あんたの
　部屋……。
お八重さん　寒いとも……。あんたの部屋は……。
おしまさん　お話にならないよ。それに、蒲團がぺらぺらと來てるから……。よつぽど、
　うちから持つて來ようかと思つてるんだけど……。序でがなくつてね。
お八重さん　あんたは、さうしてくれるうちがあるからいいわね。どうなつたの、あの
　話……。
おしまさん　……？

お八重さん　ほら、何時か、さう云つたぢやないの、誰だか、あんたをくれつて云つて
　る人があるつて……。
おしまさん　さうだつたかね。
お八重さん　自分のことを忘れてれや、世話はないや。いくらもあるからわすれるんだ
　らう。
おしまさん　さうかも知れない。どんな話だつけね。
お八重さん　なんでも、役場の書記をしてる人だとかつて……。年は少しとつてるけれ
　ど、浪花節がうまいつて……それから、小金を蓄めて、人に貸したりなんかしてるつて
　……。違ふのかい。
おしまさん　ああ、さうさう。あの話ね……。あれより、もつと、好いのがあるんだよ。
お八重さん　あんまり擇るのはおよしよ。かすをつかむよ。
おしまさん　それはね、在郷軍人なんだけれどね、一寸、男前がいいんだよ。
お八重さん　それ、いいぢやないの。

おしまさん　苦労をするから、いやだ。（間）ねえ、お八重さん、また髪を結つてくれない。

お八重さん　ああ、いいとも……。今日は、ゆつくり結へるから……。

おしまさん　（奥さんの鏡臺の前にすわり）　此處でいいのかい。

お八重さん　かまやしないよ。

おしまさん　奥さんみたいに、鏝をあてようかしら……。

お八重さん　（おしまさんのうしろに廻り、髪を解きはじめる）

おしまさん　この家の半分ぐらゐでいいから、早く、自分の家を持ちたいね。

お八重さん　かういふ鏡臺を置いてかい。

おしまさん　あんた、どんな亭主を持つてみたい。

お八重さん　知らないわよ。そんなこと……。

おしまさん　知らないことがあるものか。百姓はいやだらう。

お八重さん　百姓だつて、字の讀める百姓ならいいよ。

おしまさん　字を讀んでどうするのさ。

お八重さん　一緒に、本を讀むんだよ。

おしまさん　どんな本……？

お八重さん　面白い本があるよ。

おしまさん　自分獨りで讀めばいいぢやないか。

お八重さん　それぢや面白くないよ。讀んだことを、また話し合はなくつちや……。

おしまさん　さうかねえ。あたしや、字なんか讀めなくつてもいいから、何か、歌のうたへる人がいいね。

お八重さん　一緒に歌ふの。

おしまさん　歌ふのを聞いてるのさ。あたしや、男のどこに惚れるかつて云へば、聲に惚れるね。

お八重さん　あんたは、歌が好きだからね。何時かも、お臺所で、何か歌つて、叱られてたぢやないの。

おしまさん　歌をうたふのがどうしてわるいのさ。うたはうと思つてうたふんぢやない。
獨りでにうたつちまふんだから仕方がありやしない。
お八重さん　痛かない？　よく拔ける毛だこと……。
おしまさん　かまはずにやつておくれ。
お八重さん　隨分汚れてるわね。
おしまさん　洗ふひまがないんだもの。
お八重さん　あたしも、これで、二月目よ。
おしまさん　女中は、頭なんか洗はないものだと思つてるんだから……。
お八重さん　うちの奥さんの毛は、いい毛だよ。
おしまさん　うちの奥さんは、眞中が禿げてる……。
お八重さん　（おしまさんが、なに氣なく化粧水の瓶を取り上げたので）　それいくらだか知つてる？
おしまさん　これかい。ヘチマコロンみたいなものだね。いくらだつていいや。

お八重さん　ヘチマコロンが八本も買へるんだから……。
おしまさん　あたし、近頃、顏へ變なものが出來てしやうがないんだけれど、これをつけたらなほるかしら……。
お八重さん　およしよ、減るとわかるよ。
おしまさん　（鏡臺の抽斗をかきまはし）　こんな處に、熨斗がはひつてら……。
お八重さん　そんなにうつむいちや、駄目だよ。
おしまさん　あんた、ひびが切れたところへ何つけてる。
お八重さん　なんにもつけてない。
おしまさん　一と通り所帶道具を揃へるにや、いくらぐらゐかかるかね。
お八重さん　そんな時になつて考へても遲かないよ。
おしまさん　あんたんとこの旦那さんは、女中にはどんな風だい。
お八重さん　どんな風つて……。
おしまさん　やかましいかい。

お八重さん　そんなにやかましかないよ。
おしまさん　默つてる方かい。
お八重さん　默つてる方だね。
おしまさん　お酒は飲むんだらう。
お八重さん　どうしてそんなことを聞くのさ。
おしまさん　よく、女中にからかふ旦那さんがあるんだつてね。
お八重さん　……。
おしまさん　あたし、一寸、聞き込んだけれどね、近所で、あんたのことを、いろんな風に云つてるよ。
お八重さん　どんなこと？
おしまさん　それがね、うそかほんとか知らないけれど、奥さんが、ほら、いつか入院してらしつたことがあるだらう——あんときのことさ——なんでも、夜遲くまで、あんたと、旦那さんとの話聲が聞えたつて、……。

お八重さん　いつさ、それは……。
おしまさん　だからさ、奥さんが病院にはひつててうちにゐないだらう、その間に、旦那さんとあんたとが變だつたつてことさ。あたしや、知らないよ、そんなこた……。
お八重さん　誰が、さう云つた。
おしまさん　誰だか知らないよ。みんなさう云つてるよ。——いいぢやないか、さうなら、さうで……。
お八重さん　だつて、そんなこと、ありやしないもの……。好い加減なことばかり……。
おしまさん　痛い。そこに、カサブタがあるんだよ。
お八重さん　どこ……ここ？　御免なさい。
おしまさん　でも、旦那さんは、ちやんと、するだけのことはしてくれるんだらう。
お八重さん　なにがさ。變なことを聞くのはよして頂戴よ。もう、髪を結つてあげないから……。
おしまさん　髪は髪、旦那さんは旦那さんでいいぢやないか。——世間にいくらだつて

あることだもの……。だけど、しつかりしなきや、駄目だよ。玩具になつてるのが能ぢやないんだからね。まさかの時にや、奥さんにさう云つてやるくらゐの腹でゐなけれや、話はつかないよ。

お八重さん　だつてそんなことないんだからいいわ。

おしまさん　奥さんは、幾月入院してたんだつけね。

お八重さん　初め一月半、それから二度目には二月……。

おしまさん　それごらん……大ていわかるよ、誰が見たつて……。

お八重さん　みんながさう云つてるつて、それやほんとなの。

おしまさん　ほんととも……。誰にだつて訊いてごらん。魚屋だつて、八百屋だつて知つてるよ。

お八重さん　まあ……。

おしまさん　だけど、心配することはないよ。ああいふ人達は、あたし達の味方だからやゐ。ただ、人が知らないと思つて、大きなことを云ふと、憎まれるんだよ。さうね、幼

稚園の一軒置いて隣りに、石の門の立つた二階家があるだらう。あそこの奥さん、丸髷を結つた一寸イキなひとさ、見たことあるだらう、あの奥さん、なんだと思ふ？　お妾だつてさ。それに、たまに來る男を、「うち」が「うち」がつて云ひふらすんだつて。近所で、それを知らないうちは、旦那さんは、何か商賣で家をあけるんだと思つてたんだらう。處が、さうぢやないつていふことになると、そらね、今まで大きな顔をしてたのが可笑しくなるだらう。もうみんなが馬鹿にしちまつて、碌に挨拶もしないんだつてさ。

お八重さん　……。

おしまさん　お前さんは、また、それとは違ふよ。なんと云つても相手は御主人なんだし、それに、これまで、氣だての好い娘だつていふんで通つてるあんたのことだから、誰も、それを知つたつて、悪く思やしないさ。

お八重さん　誰が云ひふらしたんだらう、そんなこと……。

おしまさん　誰も云ひふらしやしないさ。ひとりでに知れて行くのさ。

お八重さん　（途方に暮れて）困つちまふわ、あたし……。

おしまさん　奥さんは、まだ知らないんだらう。

お八重さん　うすうす感づいてるらしいの。

おしまさん　それや、大變だ。感づいてるつて、どういふ風に……。

お八重さん　旦那さまの御用を、わざとあたしに云ひつけたりなにかなさるの。

おしまさん　さういふことがあつてからかい。

お八重さん　それや、つい、近頃のことだけれど……。少し根が固かない？

おしまさん　（頭に手をやつて）いいえ、これで結構……。ほんとに上手だわ。ありがたう。ここ、このままにしといていいの？。

お八重さん　あたしが、あとで片づけるからいいわ。

おしまさん　（長火鉢のところに戻り）そいで、何か、あてつこすりのやうなことを云ふんぢやないの。

お八重さん　そんなことは別におつしやらないけれど……この間、變なことがあつたの。

おしまさん　どんなこと？

お八重さん　旦那さまのお留守に、今まで、來たこともない若い學生さんみたいな人が來たのよ。

おしまさん　男の？

お八重さん　ええ、男の……。

おしまさん　上つたの。

お八重さん　まあ、聽いてらつしやいよ。さうしたらね、奥さんがねあたしにかう云ふの——その男が歸つてから後でよ——今日あの人が來たつていふことは、旦那さまには内證だよ。その代り、旦那さまの方にも、あたしに内證のことがある筈だから、それは、あたしが知らないつもりにして置くからつて……。

おしまさん　（感心して）さうかい。さういふことがあつたかい。

お八重さん　どう、もう一つ、おせんべ……。

おしまさん　ああ、おくれ。

お八重さん　（せんべを與へながら）あんまり減つてるとわかるから、もうこれだけよ。

おしまさん　わからないもんだね。内幕つてものは……。
お八重さん　それからつていふもの、奥さんはそれやあたしをよくするの。
おしまさん　あひみ互つてことがあるからね。
お八重さん　だけど、いつまでも、こんな風にしてていいのかねえ。相談しよつたつて、相談する人はなし……。
おしまさん　旦那さんに、さう云つてみたらいいぢやないの。
お八重さん　なんてさ。
おしまさん　なんてさつて、あたしの知つたことかね。
お八重さん　だつて、あたし、旦那さまの顔を見ると口が利けなくなるんだもの。
おしまさん　どうして？
お八重さん　どうしてだか……。
おしまさん　罪なことをするよ、ほんとに、……。だから、男はきらひさ。
お八重さん　あたし、奥さまに悪いから、お暇を頂かうと思ふの。

おしまさん　奥さんに悪いよりなにより、あんたが、それぢや、可哀さうだよ。
お八重さん　さうかしら……。
おしまさん　暇なんか取らなくつていいから、どつかへ、家を持たせてお貰ひよ。月々百圓も出して貰つてさ、暢氣に暮したらいいぢやないか。
お八重さん　あたし、お妾なんかになるのはいやだわ。
おしまさん　ぢや、奥さんを逐ひ出して、その後釜に据わるといい、お前さんにその腕があるかい。
お八重さん　そんなことはできないけれど、このままならこのままで、人からいろんなことを云はれたくないんだよ。なんでもないのに變なことを思はれてちやつまらないからね。
おしまさん　……。
お八重さん　しかし、これから先、どうなるかわからないよ、こんな調子ぢや……。
おしまさん　おどかすねえ。そいぢや、今までは、そんなことはなかつたんだね。

お八重さん　しつツこいつたら……。それでがつかりしたつて云ふんでせう。憚りさま

あたしも、それほど、おめでたく出來てやしないよ。ふんばる處ぢやふん張るよ。

おしまさん　（壁にかけた三味線を見てゐる）

お八重さん　あんた三味線彈けるんだらう。

おしまさん　ああ、でも、しばらく彈かないから……。

お八重さん　彈いてごらんよ。（起たうとする）

おしまさん　いいよ、そんなこと……。およしよ、見つともないから……。

お八重さん　だつて、かうしててもしやうがないぢやないの。何かして、遊ばうよ。あんた、戸締りはして來たの。

おしまさん　ああ、して來たよ。何處かへ行かうか。

お八重さん　そんなことしてる暇はないわ。

聲　（臺所で）こんちはあす……。

お八重さん　（驚いて起ち上り）どなた……。

聲　毎度ありがたうす。

お八重さん　あ、八百屋さん？

聲　玉葱を持つてまゐりました。

お八重さん　お苦勞さま、そこい置いといて頂戴……。

おしまさん　うちのはどうしたの、八百屋さん……。

聲　へ？（のぞいて）　あ、あんたかい。どうしたの。お留守……？

おしまさん　うちい行つても締まつてるから、そこい置いとくといいわ。あたしが、持つて歸るから……。まだ廻るの？

聲　いいえ、今日は、あんたのとこでおしまひ……。

おしまさん　ぢや、上つて、遊んで行かない。

聲　だつて、惡いや……。

おしまさん　いま、二人で、あんたの噂をしてたんさ……。

聲　常談云つてらあ……。

おしまさん　常談なもんかい、ねえ、お八重さん。
お八重さん　まあ、お茶でも飲んでらつしやいよ。
聲　足がよごれてらあ。
お八重さん　そこに雑巾があるでせう。（起つて行く）
聲　ほんとに、いいのかい。
おしまさん　いいんだよ。晩にならなきや歸つて來ないんだから……。
お八重さん　（座にかへり）こんなに散らかつてるけれど……。
おしまさん　座蒲團をお出しよ。お客さんのがあるだらう。
お八重さん　（一寸躊躇するが、思ひきつて、座敷から立派な座蒲團を持つて來る）
おしまさん　さあ、どうぞ、こちらへ……。
八百屋さん　（頭へ手をのせ）變だなあ。大丈夫かい。
おしまさん　もつと、こちらへおいでよ……二人の間へ……。
八百屋さん　（恐縮して）この上へかい、ええい、かまふこたねえや。（坐る）

おしまさん　卷煙草は、お八里さん。あ、あすこにある。（自分で立つて行つて、座敷から煙草を持つて來る）　さあ、お喫ひ下さい。
八百屋さん　煙草なら、持つてるよ。
おしまさん　持つてたつていいから、こつちをお喫ひよ。二ほんや三ぼん、わかりやしないよ。
お八重さん　（茶を酌んで出す）
八百屋さん　おほきに……（あたりを見まはす）
おしまさん　おせんべでも出したら……。
八百屋さん　かまはないでおくれよ。
お八重さん　（しかたがなしに、鑵をあけ、せんべを八百屋さんの方へ出す）
おしまさん　（二三枚つまみ出し、八百屋さんに）さ、一つ……。
八百屋さん　ありがたう。そんなことしていいのかい。
おしまさん　お前さんの知つたことぢやないよ。默つておあがり。あ、それから、お八

重さん、あたし、一寸そこまで買物に行つて來るから、八百屋さんを引止めといてちやうだいよ。

お八重さん　何處へ行くの。

おしまさん　いいから待つてらつしやい。すぐ歸つて來るから……。

八百屋さん　おれも、ゆつくりしちやをれないんだよ。

おしまさん　なに云つてるんだい。勝手な時ばかり油を賣つてるくせに……（起つて出て行く）

八百屋さん　（獨言のやうに）いつたい全體、これや、何事だい。

お八重さん　ねえ、八百屋さん、あんた、何か、わたしのことを云ひ觸らしやしない、よそへ行つて……。

八百屋さん　どんなこと？

お八重さん　どんなこつて、ありもしないことをさ。

八百屋さん　ありもしねえことつて、どんなこと？

お八重さん　知らなきや、知らないでいいんだよ。

八百屋さん　知らないよ。

お八重さん　おしまさんが、何か云やしない、あたしのことで……。

八百屋さん　いつ？

お八重さん　いつかさ。云はないかい。云はなきや、云はないでいいんだよ。

八百屋さん　云はないよ。

長い沈默。

お八重さん　世間つて、うるさいものね。

八百屋さん　（もぢもぢしながら）おれに關係のあることかい。

お八重さん　（意外らしく）お前さんに關係のあることつて、何さ。

八百屋さん　ううん、あんたと、おれと、どうかうつていふやうなことぢやねえのかい。

お八重さん　あんたと……？（吐き出すやうに）そんなことぢやないよ。

八百屋さん　（身の置き處に困り）　さうか、そいぢやいいや。

長い沈默。

お八重さん　おしまさんてば、うそばつかし。

八百屋さん　おら、もう、歸るよ。

お八重さん　待つといでよ。今、おしまさんが歸つて來たら云ふことがあるから……。

八百屋さん　おれがゐなくちやいけねえのかい。

お八重さん　ああ、あんたがゐてくれた方がいいの。（間）そんならさうで、あたしも考へがあるから……。

八百屋さん　どういふ話なんだい、お八重さん……。おれに云つてくれたつていいぢやないか。何か、二人のことでつまらねえことを云つたんだらう、あの女……。

お八重さん　……。

八百屋さん　おれや、そんなことを、云はれるやうなことをした覺えはねえんだがなあ。

お八重さん　お前さんに關係はないんだから心配しなくつてもいいんだよ。

八百屋さん　やつぱり、どつかしら、さう見えるんだね。

お八重さん　さう見えるつて？

八百屋さん　此處の家へ來る時の様子が違ふんだね、いくらかくしてても……。

お八重さん　何をかくしてるのさ。

八百屋さん　（極めて云ひにくさうに）　さう問ひつめなくつたつていいぢやないか。

お八重さん　……？

八百屋さん　どうせおれなんかにや、はなもひつかけちやくれめえと思つて、今まで默つて辛抱してゐたけれど、よそ目にもそれとわかるんなら、いつそ、いと思ひに白狀すらあ……。――お八重さん、おれや、あんたの顏を見ない日にや、頭が重たくつてしやうがねえんだよ。

お八重さん　……（あつけに取られて八百屋さんの顏を見戍る）

八百屋さん　おしまさんはどんなことを云つてたか知らねえけれど、おれの方のことだ

けは、間違ひのねえところを云つたに相違ねえ。あんたの迷惑にはなつたかも知れねえが、今云ふ通り、おれがなにも喋べつたわけぢやねえ。おれを悪く思はないでおくれよ。

お八重さん　……。

八百屋さん　おしまさんが歸つてくれやわかるこつた。

この時、臺所から、おしまさんがはひつて來る。二人は、同時に、おしまさんの顏を見上げる。

おしまさん　お待ち遠さま。いま、おすしをさう云つて來たの。（二人のただならぬ氣色に、やや不安を抱くが、例の無頓着さで）お樂みのとこぢやなかつたのかい。

八百屋さん
お八重さん　（同時に）おしまさん。

おしまさん　なにさ、改まつて……。

長い沈默。

お八重さん　あんたは嘘つきね。

八百屋さん　つまらねえこたあ云つこなしにしようぢやねえか。お互に迷惑だぜ。

おしまさん　どうしたつて云ふのさ、あたしが何を云つたつて云ふの。

お八重さん　もう忘れたの。

おしまさん　ああ、あのこと？　あのことなら、もう云つこなし……。さうさう、八百屋さんはなんにも云やしなかつたつけ……。

お八重さん　ぢや、誰が云つたの。

おしまさん　魚屋さんだつたかしら、それぢや……。そんなこと、はつきり覺えてやしないよ。魚屋さんかも知れないよ。

八百屋さん　常公がかい。あいつがなんだつて、おれのことを……。

おしまさん　お前さんのことなんかぢやないよ。

八百屋さん　ぢや、何かい、あいつも、お八重さんに……。

お八重さん　（あわてて）あんたは、默つといでよ。話が違ふんだから……。

八百屋さん　……。
お八重さん　そんなら、魚屋さんに聞いてみるわよ。
おしまさん　聞いてごらんよ。だけど、そんなことを聞いてどうするの。あんたの恥になるだけぢやないか。
お八重さん　何が恥さ、え、何が恥になるのさ。あたしやね、この人の前で云つとくけどね、そんな、みだらなことをする女ぢやないんだからね。自分と一緒にしてもらふまいよ。
おしまさん　あたしが、いつ、みだらなことをした。え、人聞きのわるいことを云ふもんぢやないよ。
八百屋さん　まあ、まあ。……。
お八重さん　あんたは、そんな人とは思はなかつたよ。
八百屋さん　お八重さん、さうまあ怒らずに、ここんところ、おれに免じて、仲直りをしたらどうだね。おしまさんも、悪氣でそんなことを云つたわけぢやあるめえ。お八重

さんの潔白なこたあ。おれが保證する。おしまさんも當て推量で、いろんなことを云ふなあ、よくねえ。若造のおれが、こんな口を利くなあ、生意氣なやうだが、おれも仲にはひつて、お八重さんに氣の毒でならねえ。
お八重さん　お前さんは默つておいでつたら……。
おしまさん　あたしが悪るかつた。ね、勘忍しておくれ。そんなつもりで云つたわけぢやない。話の調子で、つい、あんな風なことを云つてしまつたんだよ。これが、あたしの悪い癖さ。八百屋さんも、氣を悪くしないやうにね。
八百屋さん　（てれて）なあに、おれや、そんなこと……。
おしまさん　だけど、あんたを悪者にしちやつてさ。
八百屋さん　（お八重さんの方を盗み見ながら）そんなこたねえ。
おしまさん　お八重さんは正直だからね。
八百屋さん　（またお八重さんの方を盗み見る）
お八重さん　八百屋さんはいくつ？

八百屋さん　おれかい。あんたより一つ上だよ。

お八重さん　あら、あたしの年をどうして知つてるの。

八百屋さん　（おしまさんの方を見る）

おしまさん　あたしが云つたのさ。なんの話からだつけね。

お八重さん　（機嫌をなほして）あんたは、ほんとにお喋べりね。

長い沈默。

おしまさん　八百屋さん、あんたにお嫁さんを世話しようか。

八百屋さん　もうよしてくれつたら、その話は……。

おしまさん　だつて、これが初めてだよ。

八百屋さん　（お八重さんに氣兼ねしながら）また怒られようと思つて……。

おしまさん　そんなことで怒るものがあるものか。いやならいやつてお云ひよ。

八百屋さん　（空元氣をつけて）いやだよ。

お八重さん　（寂しく笑ひながら）さうさう、おしまさんなんかに頼むと、ろくなことはないよ。

おしまさん　そいぢや。誰だか云はうか。

八百屋さん　（ゐたたまらず）おら、もう歸る……（起ち上らうとする）

お八重さん　（聲を立てて笑ふ）

おしまさん　うそだよ、うそだよ。（八百屋さんの手を引張り）あんたも若いね。

お八重さん　もう、からかふのはおよしよ。

臺所で「お待遠さま、毎度ありがたう……」といふ聲。

おしまさん　（起ち上り）御苦勞さま。（出て行く、やがて、すしを盛つた皿を持つてはひつて來る。

お八重さん　まあ……そんなに澤山……？

おしまさん　たまにこれくらゐのことをしなくつちや……。

八百屋さん　あんたがおごるのかい。

おしまさん　遠慮しないでおあがり。

お八重さん　おしたぢを持つてくるわ。（臺所に行つて、小皿醤油注ぎなどを持つて來る）

おしまさん　ここのうちは、海苔卷が一番うまいんだつて……。さ、お取りよ。

三人思ひ思ひにおすしを頬張る。

八百屋さん　なんだか知らねえが、喉がつまつて、思ふやうにはひらねえや……。

三人とも、また、默々としてすしを食ひつづける。長い間。

――幕――

傀儡の夢（五場）

有田浩三
妻　倉子
書生　水垣
小間使　銀
下働　瀧
水垣の友竹中

一

有田浩三の書齋。朝。

浩三　（讀んでゐる新聞から目を放さずに、はひつて來た妻に向ひ）　おはやう。昨夜はよく眠つたかい。何か寢言を云つてたね。

倉子　（夫の手から新聞を取り上げ）　これ、もう御覽になつたんでせう。ええ、よく眠ましたわ。寢言なんか云つて、あたくし？

浩三　お前の寢言はこれで三度目だ。お前が、そんな顏をして、恐ろしい祕密をもつてゐようとは思はないが、それでも、何か、おれが知らずにゐるやうなことを口走りやし

ないかと、いつでも冷や冷やしてるんだ。

倉子　あら、そんなに、あたくしのことを問題にしてゐて下さるの。ありがたいわ。それで、あなた、今日はまたお歸りがお遲いんでせう。

浩三　遲いかも知れない。どうして？

倉子　いいえ、遲ければ遲くつてかまひませんわ。そのつもりでゐますから……。ぢや、どうぞ、お食堂へ……。

浩三　その前に、一寸お前に聞いて置きたいことがあるんだがね。（間）　お前は、家の中のことはなんでも知つてるだらうね。

倉子　……。

浩三　おれはこの通り忙しいからだで、家のことは何もかまつてゐられない。お前が、もう少し目をつけてゐてくれないと困る。

倉子　何かお氣に召さないことがあるんですの。

浩三　お前は、水垣と銀のことで、近頃何か氣がついたことはないか。

倉子　水垣と銀と……何か間違ひでもございましたの。
浩三　間違ひがあつたか、これから間違ふか、そこまではわからん。しかし、兎に角、危險な狀態にあることは事實だ。
倉子　何かさういふことを御覽にでもなりましたの。
浩三　見た。たしかに見た。
倉子　何を御覽になつたんですの。
浩三　何をつて……さういふことをさ。二人は、暇さへあれば、隅つこで、こそこそ立話をしてるぢやないか。（間）おれは、さういふところを、今までに何度も見つけたよ。今朝も、おれが寢室を出ると、箒を持つた銀と、手拭をぶらさげた水垣とが、便所の蔭で切りに內證話をしてゐた。二人は、おれの姿を見ると、慌てて左右に別れたが、その目つきは、たしかに總てを語つてゐた。
倉子　不思議ですわね。あたくし、ちつとも、そんなところを見ませんわ。
浩三　見ても氣がつかずにゐるんだらう。お前には男女關係などといふものの本體がよ

くわからんかも知れんが、若い男と女とが、人目をさけて、ひそひそ話をするといふことが、もう、ただの關係ではない證據だ。それくらゐのことはわかるだらう。
倉子　さうとばかりは云へませんわ。あの人たちには、あの人たち共通の利害問題だつてありますわ。さういふ問題についていくらも話しがある筈ですわ。
浩三　さう取りたければ取つたつていいさ。おれは、なにも、わざわざ二人の關係をやましいものにする必要はない。ただ、間違ひが起つた後では、もう取返しがつかないことがある。それを心配するだけだ。
倉子　それにしても、さういふことまで、あたくしが責任をもたなければならないんですの。
浩三　あたり前ぢやないか。
倉子　どういふ風に責任をもつんですの。
浩三　わからないかい、それが……。
倉子　だつて、二人が愛し合つてゐるんなら、それを、あたくしが、どうすることもで

きませんわ。

浩三　おい、おい、よしてくれ、子供じみたことを云ふのは……。書生と女中とが愛し合つて、家の中が治まると思ふか。

倉子　……。

浩三　若しあの二人が、愛し合つてゐるなら、さつさと餘所へ行つて愛し合つて貰はうぢやないか。

倉子　さうしたければ、さうするでせう。

浩三　どうだかわかるもんか。おれは、どうも、お前のやり口が氣に入らんのだ。おれに對しては飽くまで冷やかな態度を取つてゐながら、召使には可笑しいぐらゐ親切だね。親切なのはまあいいさ。だらしのない眞似だけはさせないでくれ。水垣には、おれから注意して置くから、銀には、お前からよく將來を誡めておくがいい。（間）序でだから云ふが、お前は、おれの妻なんだぜ。

倉子　あなたは、あたくしの夫ですわ。

浩三　それがわかつてゐるんだね。

倉子　ええ、わかつてますわ。

浩三　それなら、妻は、自分の寢室に鍵をかけて寢るものかい。

倉子　……。

浩三　おれは非常に風邪を引き易いつていふことを知つてるぢやないか。（間）水垣をここへ呼んでくれ。

倉子　御飯を召上つてからになすつたら……？

浩三　いいから、呼んでくれ。

倉子　（退場）

浩三　（別の新聞をひろげて讀む）

戸を叩く音。

浩三　よし。

水垣　（はひりながら）何か御用ですか。

浩三　お前はいくつだ。
水垣　私ですか。
浩三　お前はいくつだと聞いてれば、お前の年を云へばいいんだ。
水垣　は、二十五です。
浩三　二十五にもなつて、部屋の壁へ樂書をするのか。
水垣　壁へですか。
浩三　わかつてることを聞き直すな。あの顏は誰の顏だ。
水垣　誰の顏つていふわけではありません。
浩三　女の顏だね。
水垣　女つていふわけでもありません。
浩三　嘘つけ。
水垣　髮の毛はさうですけれど……。
浩三　銀の顏だらう。

水垣　いいえ、違ひます。絶對に違ひます。
浩三　これから、便所の蔭なんかで、銀と話をすることはならん。
水垣　は。
浩三　今度、ああいふことがあつたら、暇を出すぞ。
水垣　しかし、あれは、なんです、お銀さんが、今朝頭が痛いつて云ふもんですから、その話をしてたんです。
浩三　銀が頭の痛いのはお前の知つたことぢやない。
水垣　どんな用事があつても、お銀さんと話をしちやいけないんですか。
浩三　いかん。
水垣　しかし、それぢや……。
浩三　瀧に取り次いで貰へ。
水垣　お瀧さんにですか。
浩三　それから、お前はおれが使つてる人間だ。おれの爲にならんことをすると承知せ

んぞ。

水垣　……。

浩三　奥さんのことで、近頃、何か變つたことはないか。

水垣　奥さんのことですか。

浩三　うるさいな、いちいち……。だから、あつたら、なんでも云つてみろ。（聲を低くして）誰か奥さんのところへ、ちよいちよい來やしないか。

水垣　どういふ方がですか。

浩三　それをこつちが聞いてるんだ。

水垣　いえ別に……。

浩三　おれの留守中、奥さんはずつと家にゐるか。

水垣　をられます。一度も外へ出られたことはありません。

浩三　買ひ物なんかにも……。

水垣　はあ。

浩三　お前は、近頃、一體何を勉強してるんだ。

水垣　英語です。

浩三　少しは解るやうになつたか。

水垣　まだ大分わからんところがありますけれど……。

浩三　どうだ、一つ、外へ出て、苦學でもしてみちや……。

水垣　今だつて苦學は苦學ですが……。

浩三　だから、外へ出てと云つてるぢやないか。ここにゐても、それほど用事はないし、第一、人の世話なんかになつてゐては、奮發心が起らん。つい、餘計な邪念が起つたりするんだ。

水垣　邪念と申しますと……。

浩三　兎に角、お前は、なんの役にも立たん。云ひつけたことさへろくに出來んぢやないか。この新聞はいらんから斷われと云つたらう。まだ配達しとるぢやないか。どうしたんだ。

水垣　玄關の處へ貼り出して置きましたんですが……。

浩三　それだから役に立たんと云ふのだ。それから、お前、その頭は、見つともないから短く刈れと云つたのに、どうして刈らないんだ。

水垣　これですか。これは、ついまだ刈りませんでした。

浩三　おれの云ふことをきかんのか。

水垣　さういふわけぢやありません。さういふわけぢやありませんが、急に短く刈ると變だらうと思ひまして……。

浩三　さういふ料簡だから瀧なんかにまで馬鹿にされるんだ。

水垣　お瀧さんが何か云つてましたか。

浩三　……。

水垣　あん畜生！

浩三　もういいから、心を入れ替へて勉强しろ。

水垣　あ、昨夕六時頃、先生に電話がかかつて來ました。

浩三　何處から……。

水垣　事務所からです。

浩三　事務所から？

水垣　はあ。

浩三　奥さんは、それを知つてるのか。

水垣　いいえ、私が出ましたから、そこは、心得てをります。

浩三　默つてたね。

水垣　無論です。

浩三　よし。そのつもりで、しつかりやれ。

——幕——

二

食堂――夕食の後。

倉子　（ナプキンで口のあたりを拭ひながら）あたしは、もう慣れてしまつたよ。どうせ初めから愛のない結婚なんだもの。ちつとも不思議はないからね。考へやうによつちや、それが不幸だとも云へるけれど、あたしがこの家へ來たために、親一人の命を救ふことができたんだと思へば、天に感謝してもいいわ。

銀　それや、お忙しいと云へば、それで通りませうけれど、毎日毎日、これぢや、あんまりでございますわ。

倉子　お仕事が過ぎると思へば、あたしも、おからだに障りはしないかつて、さう申し上げてもみるわ。だけど、御用つていふのは、ほかの、面白い御用らしいから、かうやつて默つてゐるのよ。お互に、家でつまらなささうな顏をつき合せてゐるより。かうして、夜遲く歸つて來て下すつた方が、あたしも樂だからね。

銀　でもまあ、奥さまはよくそんなことがおつしやれますわね。

倉子　お前なんかは、自由で羨ましいよ。奉公をしてるのは、からだを縛られてるんぢやないからね。ここがいやだと思へばほかへ行つたつていいんだし……。したいことをして、主人の氣に入らなければや、そんな主人は主人と思はなければやいいんだしさ……。

銀　さうは參りません。あたくし、そんな氣持にはなれませんわ。かうやつて、可愛がつて頂いてゐれば、何不足はございませんけれど、この上我儘を致さうとは夢にも思ひません。

倉子　お前、水垣をどう思ふ。

銀　水垣さんでございますか。どうつて別に……。

倉子　あの人は、あの通りぶつきら棒だけれど、情の厚さうな人だね。お前のことをそれや思つてるんだよ。

銀　いやでございますよ、奥さま。

倉子　ほんとだよ。若し、さうだつたら、お前、あの人と結婚する氣はないかい。

銀　おからかひになるなら、あたくし、あちらへ參ります。

倉子　あちらへは何時でも行けるから、まあその話を進めてからにしようぢやないか。あたしは、自分がこんな生活をしてゐるから、お前たちだけでも、せめて、ほんたうに愛し合つてゐてくれれば、このうちの中が、よつぽど明るくなるだらうと思ふの。お前たち二人のよろこびが、あたしの冷めきつた心に、いくらかでも暖かみをつたへてくれるだらうと、それを樂しみにしてるの。さういふうちの中の出來事を、かれこれやかましくいふ主人もあるさうだけれど、あたしは、そんなことかまはないの。却つて、うれしいわ。

銀　奥さまは、そんなこと、お一人でおきめになつていらつしやいますの。あたくし、

水垣さんつて、なんだか、蟲が好きませんの。

倉子　だつて……。そんなことないだらう。隨分、親しさうに話をしてるぢやないの。

銀　そんなに親しさうに見えます？　……それや、遠慮はなくなつてゐますわ。常談ばつかり云ひ合つてるんでございますもの……。

倉子　常談が云へるくらゐなら、眞面目な話だつて出來るわ。さういふ話は、まだしたことないの。

銀　ございません。

倉子　一度も？

銀　あの人に聞いてごらん遊ばせ。

倉子　あの人は、だから、お前が好きだつて云つてるのよ。

銀　何時そんなことを申しました。

倉子　今朝。

銀　ほんとでございますか。

倉子　……。
銀　いやな人。
倉子　あの人だつて、云ひ悪いことを云つたんだらうから、お前も、恥かしがらずに、あたしにだけ、思つてることを云つたらいいぢやないの。悪いやうにはしないよ。あたしが萬事引受けるから……。
銀　あの人が自分でそんなことを云ひに參りましたんですか。
倉子　さあ、それはどうだか。
銀　そんなことをして、あとできまりが悪いもんだから、人が口を利いても、返事をしないんでございますよ。圖々しい人つたら、ありやしない。
倉子　そんなに怒らないだつていいぢやないの。お前に直接云ひ出して、すげなく斷わられるよりと思つたんだらう。お前が堅い女だつていふことを知つてるだらうからね。それより、あたしに云へば、またなんとかなるだらうと思つてさ。それやたしかに利口なやり方だよ、それに、その方が、態度としても立派だ。頼もしいぢやないか。お前から好い返事が聞ければあの人だつて勉強するのにも張合ができる。四五年のうちには、一人前の働き手になるだらう。それまで、先を樂しみに、一緒にここで辛抱するさ。

銀　あたくし、なんですか、そんな氣になりませんわ。
倉子　ぢや、どうしてもいやなの。
銀　もう少し考へさせていただきます。でも、結婚なんて、まだ、そんなこと考へたことございませんですから……。
倉子　だから、すぐ結婚しなくつてもいいのさ。つまり許婚だね。戀人同志つて云つてもいいわ。毎日同じ家で顔を合せてゐる戀人なんて洒落てるわ。あら、まだ行つちまつちや駄目よ。
銀　お茶が冷めましたでせう。
倉子　いいの。ぢや考へて置くね。あしたの晩返事をしておくれ。ここ片づけるのはあとにして、一寸、瀧を呼んで來ておくれ。
銀　お瀧さんはお風呂をたいてをります。

倉子　かまはないから、すぐ來るやうにお云ひ。

銀　あたくしのことはなんにもおつしやらないで……。

倉子　ああ、わかつてるよ。

銀　（退場）

瀧　（登場）

倉子　近頃、お前たちの部屋へ水垣が遊びに行きはしないかい。

瀧　はい、時々、來なさいます。

倉子　お前のところへ來るのか、銀のところへ來るのか、どつちだい。

瀧　さあ、どつちだか、わかりませんです。

倉子　お前一人の時でも來るかい。

瀧　はい。

倉子　どんな話をするの。

瀧　よく覺えてをりませんです。

倉子　お前、あの人が好きだらう。

瀧　水垣さんですか。好きつていふこともないですけれど……。

倉子　好きなら好きでいいんだよ。お前に、あの人、何か云つたらう。

瀧　どういふことでございますか。

倉子　あの人がね、銀をお嫁さんに欲しいつて云つたら、お前どうする。

瀧　……。

倉子　どうするぢや困るね。お前平氣でゐられるかい。

瀧　わたくしはなにも、水垣さんのなさることを、かれこれ云ふわけはございませんです。

倉子　それやさうだけれど、お前をなぜ欲しいつて云はないか……そんなこと思やしないね。

瀧　そんな馬鹿な、奥さま……。水垣さんはお銀さんをお貰ひになるんですかね。

倉子　まだ決まつてやしないのさ。ただ、あたしが、さうしたらと思つてるだけなの。

お前には、また、いいお婿さんを世話するよ。

瀧　あら、そんなこと……。

倉子　それぢや、もういいから、早くお風呂をわかしておくれ。今のことは誰にも默つてるんだよ。

瀧　はい、お風呂はもうよろしうございます。（退場）

倉子　（茶を飲み乾し）銀や、銀や……。

銀　（現はる）お呼びでございますか。

倉子　もう十分ほどしたらお湯にはひるからね。オー・ド・コロオニユを持つてつといておくれ。それから、應接間の窓を一度開けてね、あとでピヤノを彈くから……。さつき、一寸はひつてみたら、埃臭くつて……。掃除をする時は、面倒でも窓を開けなくつちや……。蠟燭を忘れないでね。

銀　お蠟燭は二本でよろしうございますか。

倉子　ああ。

銀　お瀧さんが、今、あたくしに變なことを申しますんですよ。

倉子　なんて？

銀　奥さまは御親切な方だねえつて……。

倉子　ほんとだからいいぢやないの。

——幕——

三

應接間――ピアノの蠟燭立に蠟燭が二本點いてゐるだけで、部屋の中は半ば闇である。

倉子　（ピアノに向ひ、彈くともなしに鍵盤を弄んでゐる。それは、自分の言葉に伴奏をしてゐるやうでもある）あんたも、男のくせに意氣地なしね。

水垣　（少し離れたところに立つたままのシルウエットが見える）

倉子　若い時は二度なくつてよ。勉強も結構だけれど、花やかな夢は活字の中にあるんぢやないでせう。

水垣　……。

倉子　それや、將來のことも考へなけりやならないわ。しかし、ただコツコツ本を讀んでゐて、それで人間が何かになると思つたら間違ひよ。

水垣　……。

倉子　眞面目だつて云はれるのは、得なこともあるけれど、そのために、自分がだんだんひからびて行くのに氣がつかなければ、結局、眞面目なのは不幸なんだわ。感情の燃え上らない人間は、絃の切れた樂器のやうなものよ。ピアノは、かうして彈くために作られたんだし、人間は、少しでも多く愛するために生れて來たんだわ。（間）さう思はない。

水垣　……。

倉子　あたしはもうおしまひ……。かういふ結婚を選んだのも、完全に獨りつきりになるためよ。この世の中には、愛するといふことを許されてない人間がゐるのね。あたしもその一人よ。さういふ人間は、人から愛されることが苦痛なの。さういふ自分を、ほ

んたうに勞つてくれるのは、自分だけだと思ふわ。だから、それでいいの。

水垣　……。

倉子　男でも、女でも、一生の運命を定める時機は、たつた一度ね。人はよく、それを知らずにゐて、折角の幸福を逃したり、遭はなくつても濟む不幸に遭つたりするんだわ。自分の求めてゐる相手だつて、案外手近にゐることがあるのね。どつちも氣がつかずにゐたり、一方がそれと感じてゐても、それがそのままになつてしまつたりするの。——あたし、さういふことが、それやよくわかるやうになつて來たのよ。

水垣　（頭をかかへて椅子の上に倚りかかる）

倉子　（默つてピアノを彈きつづける）

水垣　（突然、起ち上る）

倉子　（その氣色を感じて、靜かに後ろをふり向く）　どうしたの。もう行くの。

水垣　（恐る恐る倉子の方に近寄る）

倉子　（それには氣がつかぬらしく）　だけど、さういふ時、女はつまらないわ。だつて、

女の方が自分の運命については敏感なのよ。——この人と思ふ人が自分の目の前に現れても、それと相手に知らせることが出來ないんですもの。それや、さういふ機會が全くないわけぢやないわ。でも恐ろしいの——水の底に平和な國があると思つても、その水の中に飛び込むのが恐ろしいやうなものだわ。

水垣　（立ち止る。手がふるへてゐる）

倉子　どうして、あんたは、さう意氣地がないの。

水垣　（何ものかに怯えたやうに、後ずさりをし始める）

倉子　それぢや、あたしが、あんたのすることを教へてあげるわ。いいこと……？

水垣　（立ち止つて、先方を見つめてゐる）

倉子　その前に、はつきり返事をして頂戴。あんたは、あたしにかくしてることはない……？

水垣　……。

倉子　あんたは、まさか、ほかに好きな人があるんぢやないでせうね。

水垣　……。

倉子　そんな筈はないわね。それぢや、あんまり可哀さうよ。はつきり名前を云つちやわるいから、「その女」つて云つとくわ。――その女は、この頃、考へ込んでばかりゐるわ。心の中では、きつと、かう云つてるのよ。――自分がいくら想つてても相手は氣にも留めないでゐる。どうかした時に、この耳もとで、あの人の優しい聲が聞えるやうなことはないかしら……。たとひ、それは夢でも、その夢はいつまでも覺まさずに見つづけてゐようものを……。――それから、かうも云つてるわ。――あの人は、若しかしたら、自分のことを想つててくれてるのではないかしら……。ただ、これを云ひ出さずにゐるのは、あたしの氣持がわからないからだらう……つて。今度あの人が、あたしの顏を見たら、精一杯情をこめて、あの人を見返してやらう……。あの人の目が、一寸でもあたしの目を讀まうとしてゐたら、あたしは、心の中のありつたけの想ひを、この目の色に現はしてゐよう……つてね。さあ、あんたは、どうすればいいの？

水垣　（われに還つて、あたりを見まはす。何か口の中で云つてゐるが聞えない）

倉子　あたしの昔識つてたある男は、どんな女に向つてでも、「僕はあなたを愛します」つて云ふのは、「僕はかういふ者です」つて名刺を差出すやうなものだ。それからまた、その女に、「僕を愛してくれますか」つて聞くのは、「あなたのお住ひは……」つて訊ねるやうなものだ。――さう云つてるの。男がさういふ風だと、女も樂だわ。あんたも、さういふ風に、一度、やつてみたらどう。

水垣　……。

倉子　硬くなつちや駄目よ。むつかしいことを云はうと思つちや駄目……。十七世紀の佛蘭西では、美文もどきの口說が流行つたつていふけれど、現代は萬事お手輕專一よ。祕密通信、ね、暗號電報、これに限るわ。

水垣　（再び倉子の方に近づきながら）奥さん……。（間）奥さん……。

倉子　（默つて、ピアノを彈きつづける。今度は、相手の言葉に伴奏をしてゐるやうである）

水垣　（倉子の耳もとに口を寄せ）奥さん……。

倉子　（ギョッとして、首を縮める）いや、そんなにそばへ來ちや……。

水垣　（驚いて、一歩後へさがり）　奥さん、お願ひです。僕はどうしていいかわからないんです。

倉子　……。

水垣　僕は、今までそんな事は夢にも考へてゐなかつたんです。かういふことにならうとは思ひませんでした。僕は、何一つ役に立たない人間です。そして誰からも、優しい言葉をかけられたことのない人間です。それは、奥さんが一番よく御存じの筈です。僕はみじめな男です。お瀧さんにさへ馬鹿にされる男です。

倉子　……。

水垣　僕は幾度も、自分の事を疑ひました。しかし、今夜といふ今夜、僕は二十五年間、微々たる存在を續けて來たことが無駄でないのを知りました。奥さん、僕の心臓はこの通り鳴つてゐます。僕の感情は、この通り燃え上つてゐます。

倉子　（靜かに後ろをふり向き、やがて、またすぐに元の姿勢に返る）

水垣　奥さん。僕は物事を正直に解釋する人間です。來いと云はれたところへ、目をつ

ぶつて行く人間です。さ、行きますよ。僕の顏を見ないで下さい。

倉子　（平氣を裝つて、ピアノを彈きつづける）

水垣　（一歩二歩、倉子の方に近づくが、どうしてもそれ以上進めない。兩手を前に差し出し）助けて下さい。奥さん、後生ですから僕に元氣をつけて下さい。

倉子　……。

水垣　嘘でせう、今のはみんな嘘でせう。僕は、一度、神田の下宿にころがつてゐる時分、女名前の手紙を貰ひました。それは、しかし、友達の惡戯でしたが、その時の胸騒ぎ、ああ、あの興奮は、僕の青春を歌ふただ一つの思ひ出です。その思ひ出が、今甦つて來たのです。いいえ、そんなものとは較べものにならない。僕は、目の前に、美しい瞬間を見てゐるのです。素晴らしい戰慄を感じてゐるのです。今です、奥さん、僕が命を捧げても悔いないのは……。（一歩前に出る）今です、今です、ああ、今です……。（一歩前に出かけて、そのままそこに蹲る）

倉子　（この間やや激しくピアノを鳴らす）

水垣　駄目だ。どうしても駄目だ。

倉子　（急に靜かな曲を彈き始める）

水垣　やつぱり僕は、ぢつとしてゐませう。ぢつと、壁を見つめてゐませう。壁の上へ、せめて鉛筆で落書をしませう。僕の求めてゐる相手は、きつと、壁の中にゐるんでせう、その顏が、僕に笑ひかけてくれた時、僕は、それに返事をしませう。その返事だけは、もうとつくに用意してゐます。

倉子　（後ろをふり向き、水垣に、笑ひかける）

水垣　（われを忘れて、飛びつくやうに）奥さん……（その手が倉子の肩先に觸れようとする）

倉子　（それを、輕く外し、起ち上つて、ピアノを離れ、水垣の方を優しくにらみながら、やや高く）今呼んであげるわ。銀や……。（間）銀はゐないかい。

銀　（現はる）

倉子　（遠ざかりながら）ピアノの蓋をしめてお置き。それから、蠟燭を消して……。

（去る）

銀　（水垣のただならぬ樣子を眺めながら、氣味わるげに、ピアノの蓋をしめ、蠟燭を持つて行かうとする）

水垣　（それを制して）もう暫く、そのままにしておいてくれ給へ。それから、君、その椅子にかけて……。

銀　（不思議さうに水垣の顏を見つめる）

水垣　いいから、そこへ腰かけてゐ給へ。一寸でいい。賴む。

銀　（しかたがなしに、倉子の腰かけてゐた椅子にかける）

水垣　さう、さう、さうだ。（間）お銀さん、今、忙しいかい。

銀　奥さまがおやすみになるのに、あたしがゐなくつちや……。

水垣　さうか、そいぢや、しかたがない。

銀　何か用なの。

水垣　いいや、なんでもないのさ。ここでしばらく話でもしようと思つてさ……。

銀　さうしちや、をられないわ。また、暇な時ね。いいこと、消すわよ（蠟燭を取り上

げて、火を消す。闇の中で）あぶない。駄目よ、いたづらしちや……。あら、なにツする
の……（平手で激しく頬を打つ音）

――幕――

四

書生部屋――西日が照り込んでゐる。

水垣　（頭のふけを落しながら）なるべく早い方がいいんだ。
竹中　（腹這ひになり）そんなことぐらゐで、一々面目騒ぎをしてちや、日本中に住む處はなくなるぞ。
水垣　おれも男だ。女中風情に頭が上らなくつちや、生きてる甲斐がない。
竹中　なんだつて、また、常談にしちまはないんだ。
水垣　だつて、暗がりだぜ。

竹中　暗がりだつていいぢやないか。――奥さんに知れたのか。
水垣　もう、奥さんの話は止してくれ。目の中が痒くなる。
竹中　へんな病氣でやがら……。
水垣　煙草もつてないか。
竹中　こつちが聞かうと思つてたんだ。その邊に煙草屋ないのか。
水垣　そこ出るとすぐある。買つて來いよ。
竹中　買つて來るから、金を出せ。
水垣　生意氣云ふない……。おい、ほんとに、さつきの話、どうかしてくれよ。
竹中　まあ、待て。あわてるな。そこで、そのお銀さんとやらは、幾歳だい。
水垣　二十三だ。
竹中　教育はあるのか。
水垣　どうして。
竹中　いや、おれに考へがある。

水垣　つまらんことを考へてるひまに、おれの身の振り方をつけてくれよ。おれは、今朝から、この部屋を出ることが出來ないんだ。顏を洗はずゐる始末だ。
竹中　それでも洗ふことがあるのかい。
水垣　毎日洗ふさ。時々は、奥さんが湯殿へ忘れて行つた佛蘭西製の石鹼で鼻の孔まで洗つてやるんだ。豪勢なもんだらう。
竹中　つまらねえことを威張りやがる。奥さんの部屋つてな、どこだい。
水垣　迂散臭い目付をする奴だなあ。二階だよ。
竹中　この上か。
水垣　何處だつていいぢやないか。あとで拜ましてやる。氣絶するな。
竹中　貴樣も奴隷根性が發達しやがつたなあ。しつかりしろ、しつかり……。母校の名譽に關するぞ。
水垣　母校の名譽だ？　ニキビ書生らしいことを吐かしやがる。手めえはなんだい。萬年豫備校がそんなにえらいか。